

幼児の教育

第六十三卷

第八号



8

日本幼稚園協会

TOSHI

幼児のための
紙芝居です



● '64年度幼児テキスト紙芝居全集第5回配本中

もんきーちゃんのすききらい

¥ 350 すききらいをなくそう
画・渡辺加三

たまごをだいたぞうさん

¥ 350 約束をさいごまで
やり通す
画・石川雅也

じょうぶにそだてる
よいこの保健

監修 愛育会幼稚園 植松治子
¥ 1000 B 3 版 10枚

東京都渋谷区千駄ヶ谷5-17〔振替東京〕株式会社 教育更劇
TEL (341)3400・3227・1458〔29855〕

あひるのぎょうれつ

小林純一・詩
子どもの歌曲集

あかちゃんひばり・みつばちふんぶん・あじさいてまり・くりのみとこりす・やまばと・かみふうせん・あひるのぎょうれつ・おおきなたいこ他48曲

装幀・さしえ 中原収一
B5判 100頁 330円

株式会社フレーベル館発行





幼児の教育 目次

——第六十三卷 八月号——

表紙 鈴木寿雄

相対的独立の認識……………	松村康平……………(2)
幼児教育における積木の重要性……………	鼻地三郎……………(6)
ガンバリの力を育てる遊びと素材……………	
(その二) 糸まき……………	清水エミ子……………(13)
幼児のためのよいお話……………	本田和子……………(27)
継続するあそびの計画と実践……………	
製作から、ごっこ遊びまで……………	山本益世……………(34)
幼稚園教育課程の実践的研究……………	
幼児の成長体系を求めて……………	大津市立長等幼稚園……………(39)
教育図書を紹介……………	山村きよ……………(52)
暴れっ子と黙りっ子……………	前田茂則……………(53)
ヨーロッパの旅……………	平井信義……………(59)

相対的独立の認識

松 村 康 平



一

深い穴の中に、落ちていく。

どんなに声をたて、手をふり、足をバタつかせてみても、落ちていく速度を遅くすることはできない。落ちるのをとめることはできない。

自分の力ではこれ以上どうにもならない世界のあることに、気づく。それは、日常のチョットした出来事ひとつをとらえても、気づかれることである。

人間は自然を変革することができると、知っていても、自分は自然の力、物理的条件に規定され、その法則にしたがっている自分を、どこかで見いださざるを得ない。

人間のつくった機械であることを知っていても、その機械の動きにさからうことのできない自分を、見いだすのである。機械の前から離れても、「物」に規定されて、その法則にしたがってしかふるまうことのできない自分を、見いだすのである。

人間はまた、社会を変革することができると、知っていても、自分は社会の力・経済的条件に規定され、その法則にしたがっている自分を見いださざるを得ない。

人間はまた、自己を変革することができると知っていても、自分は身体状態、生理的条件に規定され、その法則にしたがっている自分を感じ、そういう自分を見いだす。

私は、だが、それらの、物理的条件、経済的条件、生理的条件などに規定されて、その法則にしたがってしか、ふるまえないのである。

ろうか。

私は、自分が、これらの条件に規定されている事実を、認めざるを得ない。私は、これらの客観的現実の規定されている。しかし、その現実から相対的に独立した世界の法則に規定されてふるまう自分を、私は見いだすことができる。

私が、心理学の研究を続け、心理学的研究に裏づけられた生活態度をとれるようになっていくからであろうか。

客観的現実から相対的に独立した世界が、開かれていることを、私は確認しており、その世界の法則に規定されてふるまう自分自身を、見いだす。しかも、この世界は、自分とその世界とのかかわり合い方によって、変化する世界である。常に変化してやまない可変的な世界である。そして、この変動をもたらずものが自分であり、また、この自分だけでなく、自分と関係的に存在する他者によって、変動される世界であることを、私は知っている。

この、客観的現実における法則とはことなる法則の科学的発見が可能な、客観的現実から相対的に独立している世界。この世界の変革は、客観的現実の変革を可能にする。

この世界があって、人間による客観的現実の変革が可能であるといえるであろう。客観的現実の反映としてとらえることのできる世界であっても、その反映は、人間の活動（労働）を媒介としてなされる。そして、この活動にかんする法則的事実の解明が可能なのは、まさにこの世界においてである。この世界における法則的事実

に規定される活動を媒介としての、客観的現実の反映であり、変革である。

この世界が、客観的現実とかかわりあう、そこでの法則的事実の発見は、客観的現実の変革に必要であり、この発見のもたらず客観的現実の変革によって、相対的に独立しているこの世界の変革も可能になる。このことは、確然とした事実である。しかし、相対的に独立した世界での法則の発見が、この世界の変革をもたらずものとなることもまた、事実である。この事実は、しかも、科学的検証可能な経験的事実であり、私たちは平常、この事実の充滿した世界で、生活している。

このような認識に立つとき、物理的条件、経済的条件、生理的条件などに規定されても、それには規定しつくされない条件発見の可能性があるという認識が、新しく成立する。この認識に立つ活動の結果において、前述した条件に規定しつくされていると判断できるような事態に、立ちいたる可能性もある。けれど、その可能性がたとえ予測されても、それらの諸条件に規定しつくされない、変革可能な世界にあっての生活態度は、くずされることがない。それでこそ、この認識に立つことによって導かれる実践的態度である。

深い穴の中に、落ちていく。

そのとき、変革可能な世界の、認識と態度が、明確化していく。そこに、人間らしさをとらえる。人間らしい生き方を、そこに見い

だす。

あきらめて、落ちていくのではない。

思わず出す手に、木の枝をつかむのでもない。

変革可能な条件を、探し続けることにおいて、手が枝をつかみ、足も支えを、きぐりあてるのである。

保育において、あきらめることなく、変え得る条件をみつめて活動し続ける保育者は、この生き方に、共感するであろう。共感する人たちがいるなら、このように生きながら穴に死ぬ人も、なお生き続けることができるであろう。人間の営みの続く限り、人間らしい生き方と共に、その人が、関係的に生き続けると、いえるからである。そして、

このような人間らしい生き方をする人たちがひとりでもいる限り、その人と関係的に存在する他の人たちは、たとえ、そのような生き方を自覚していなくても、人間らしく生きる可能性を担って生きる。たとえ、かつてはそのように、自覚して生きた人が、なんらかの事情によってそのような生き方を、自覚してはすることができなくなっても、関係的に存在する他の人たちが、その関係の担い手として、人間らしく生きるならば、その人もまたそのように生きる可能性を担って、生き続けるといえよう。

二

八月のはじめであった。一九六三年の夏である。

日本を離れて四十日。(この間の事情は、その一部を、いまは休刊になっている雑誌「マザーズスクール」創刊社十月発行誌に「イスラエルの子ども」と題して写真と共に寄稿、また、お茶の水女子大学児童文化研究会誌に「転化現象—文化の形成過程—」と題して寄稿し、掲載された。これより前、帰国直後、雑誌「保育」編集部からのたつての依頼で、自由に書くことの許しを得て寄稿したが、これはいまだに掲載されていない。)

イスラエルには、一週間の滞在であった。

七月十日に羽田をたつて、ロンドンに立ち寄り、イタリアのミラノでの国際会議に出席した。集団心理療法の科学者会議で、これとほかに、二つの国際会議に参加するのが、主な目的であった。その一つが、イスラエルのテル・アビブで開催されるはずであった。これが変更になったが、予定した日数だけは、イスラエルにいた。それで、各地に歩をのばす機会がふえた。

テル・アビブに二日。砂漠の中を、バスで南の端までくだる一日二日の旅。北にのぼつて、ガリレア湖畔に一泊。ナザレからハイファに出て、テル・アビブにもどり、次の日は、東に、死海の近くエルサレムまで。ベツレヘムにも、旧約聖書に銘されている史蹟を、数多く、たずねることができた。

印象深く、いまでも鮮明に想い出されるのは、遠く続く砂漠の一角に、緑に繁げる樹木にとりかこまれて、一群の家屋のみられる風景である。ゆきすぎた砂漠の果ての、また一角に、人の団結による力がつ

くりあげていく地域社会をみだせた。キブツと呼ばれる生活圏であつて、共産制が施行されている。そのキブツから出ることの自由もまた認められているところに、イスラエルの特色があるという。

五十年の歴史をもつこのキブツと、近代建築の立ちならぶ都市と、せまい路地に昔ながらの建物が密集している部落。このどこにも子どもたちはいて、その精神構造は、それぞれちがつてつくられるのではないかと、思われた。

この国のどこでも、しかしおとなたちは、この土地への愛着を根強くもっている。それは、千九百年ぶりの故郷の土地だからでもあらう。

外から内への軌道が、ハッキリと敷かれているなかで、すべてが育つかにみえた。外部からの思想も、文化財も、内部の発展をもたらすかたちでのみ、とりいれられていくかにみえた。

いまは、敵対的矛盾を発展の契機としてではなく、この国の内部における非敵対的矛盾の発展が、その繁栄をもたらすかにみえた。この場合、内部には見いだしにくい事実の発見が、遅れることなくなされていくためには、外から内への軌道にのつて、外部のものとりいれられていくことが必要であらう。そしてこの、外部のもの内部のものへの転化がさかんにおこなわれていて、転化の速度をはやめ、飛躍的な発展のもたらされることが、予見された。

このような「転化現象」が顕著にみられるところ。

奇蹟の建国がおこなわれたイスラエルの地。(村松剛著「ユダヤ人」中公新書、参照。)

そこには、「不滅の宗教集団」があつて、客観的現実から相対的に独立した世界の、顕著な展開がみられる。

政治的、経済的条件からの相対的独立(国連での建国への議決では、ソ連もアメリカも賛成し、イギリスは棄権。建国への戦いは、チェコ・スロハキアが支援している。国内における貧富の差は、差としての意義をもたぬほどに、国外との関係においても差をつくりだしていく。)

自然的条件からの相対的独立。(たとえば、キブツの出現はこれを実証している。)

(生理的条件からの相対的独立。(混血によって人種的偏見からの脱却が、可能となつている。))

この、相対的独立の「科学的認識」よりは、宗教的信念にもとづく実践的態度が、この地における繁栄をもたらしているともいえる。(一部では、宗教集団内の同族結婚によって、消滅への方向をたどるかにみえる現象や、アラブ諸国との葛藤に、繁栄の道がどのように拓かれていくか。予見の困難な条件はあるが、客観的現実から相対的に独立した世界の展開を、明確に認識することのできる歴史的事実を、イスラエルにおいて見いだせるのである。)

幼児教育における積木の重要性

鼻 地 三 郎



は し が き

幼児期を積木時代という人があるほど幼児は積木をもって遊ぶ。おそらく積木を弄ばずしておとなになった人はいないであろう。人間が他の動物と違って、今日の文化を築きあげたことは、手を使い、道具を使うことによるものである。子どもは三、四才になると積木をもって遊び、その遊びに熱中する。ジョンソン女史によれば幼児は二才頃から積木に興味を持ち、木片を汽車としたり、コップとしたり、家としたりして類似の形のものをも木片でいろいろに象徴化して喜ぶといっている。

一、波多野勤子は、「幼年期」の中で、自分の子どもが三才五か月から非常に積木に興味を持ち出したことを記録している。積

木によって建築主となり、積木遊びをやりだすと、一生懸命で一時間位建てたりこわしたりして遊んでいる、と。

積木は子どもにとっては無くてはならぬものであり、積木によって手先の訓練を行なうと共に諸種の精神発達を促すものである。それで知能テストにも積木が用いられているわけである。

幼児は、それぞれの能力が発達しようとする時、その機能を自発的に使用しようとするものである。この事を「自発的使用の原理」と呼んでいるが、ジャシーホルドのことはをかりれば、各器官はいわば自らつとめて作用しようとする。子どもがしきりにやりたがることは、その時発達しつつある能力を使用することなのである。運動の発達が適度に達すると、別に子どもを誘発するよ

うな目的がなくても、自然に匂い、歩きはじめ、走り出すのである。

幼児が積木を積み、木片を遊ぶのは、子どもの大筋肉から小筋肉の発達しつつある時期なのである。その時期にただ何もしないで、ほおっておいてはならない。いろいろな種類の積木を与える事は、身体的発達の上からも、教育の上からも重要なことである。積木は幼児の成長発達に如何に役立つものであるか、その教育的機能について考えてみよう。

一、感覚の訓練

手は外にある脳髓である。人間の行動の基本となる知的活動は、大脳の支配によるものであると生理学は教えている。しかも哲学者カントは、「手は外部の脳髓なり」といつている。

人間の手先の皮膚面の感覚は鋭敏である事は周知の通りである。温覚、冷覚、圧覚、痛覚を感じる温点、冷点、圧点、痛点が生ずることは多く分布して、外界の様相を知覚することができることは心理学の教えるところである。

外界を認知するのは、こうした要素の神経末端の感覚だけで行なうものでももちろんない。視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚などいわゆる五官の作用の協同結合によらねばならない。幼児期に最も好んで用いるものは触覚であり、触覚は手によって多く感じら

れる。角と平面、大きさ、重さ、硬軟、粗密、乾湿などは手の触覚によって、それぞれ区別せられて知覚される。盲人は別として、普通の者はこの触覚と視覚とが協同して知覚し、後に視覚だけで認知できるようになり、物の表面を見るだけで、その弁別ができるようになるのであるが、そのはじめは手に触れることの経験によるものである。尖っているという印象は空間的に極小の部分の圧の感じであり、粗滑硬軟などの感じは、いろいろな圧の感覚が、運動及び抵抗の感覚と結びついたものであり、乾いた感じはざらざらしたものの経験からはじまるのである。我々が外界を知覚する感覚器官に近官と遠官の二つがある。触覚は近官により視覚聴覚は遠官によるものである。近官といえは身体の表面にある器官が、直接対象物に触れねばならない。粗滑は物の表面を手でなでて知ることができるのである。それに反して、遠官とは視覚の如く遠い所のものを認知するものであり、自動車の接近することから、大空の星の存在までを知ることができるのである。

いろいろな感覚のうちで触覚の優位なことは、人間の個体発達の過程を見ても明らかである。新生児においては生れると間もなくいろいろな感官印象の中で、最高の強さまで達した圧覚が、いち早く生命の閾に現存体験を伝達することができる。生れたその日から栄養摂取という生命保存の重要な機能は、吸乳の際の唇や、唇の周囲の皮膚による触体験に結びついて現われる。シュテ

ルンは新生児の最初の空間は口のまわりであるといっている。乳児は何でも口唇にもってゆき、幼児は見るものを直ちに手や足で触れたがる。子どもは触れることにより事物の存在を認識するのである。触れてみてはじめて外界の存在を確認することになる。

触感覚が教育の上に重要であることについては、感官の陶冶が教育学者の重要な問題にされて以来、実際教育において重んぜられてきた。ルソーはエミールの教育において、振動感覚の練習を主張しているし、ルソーは圧覚及び立体触知的な作業の訓練、殊に触覚による形の認知などをあげている。

幼稚園の創始者フレーベルの思物は、視覚と触覚の訓練に利用され、特に幼児の感覚訓練が重視せられた。モンテッソーリの有名な保育機関においては、感覚の組織的訓練が大部分を占めていたと同時に、触覚の練習課題も加えられた。触覚によって、いろいろな対象物の表面構造を触知させるために、園児に触材料のセツトが用意せられ、眼を閉じて練習することが要求せられた。知覚機能は思考機能に転換していくものである。現在の幼稚園教育において感覚訓練は教育の重要な部面であることは論をまたないところである。

二、構成能力の養成

幼児は自分で積木を積み、組立て、あるいは繋ぎあわせて、諸

種の形を構成する。はじめは、母親などが積み重ねたものを、くずすことに興味をもち、何度も何度も同じことを繰り返しているが、次第に自分で積木を重ねたり積みはじめる。でたために上に置くだけでなく、計画的に家を作ろう、汽車を作ろう、東京タワーを作ろうということになり、自己の心の中で想像計画したこと、積木によって構成しようとする。

ハンフマンは三才ないし六才の子どもの自由な積木遊びについて三つの段階があると、いっている。(一)手近の材料を無計画に次々に積み断片的積木の段階、(二)何かある全体的な形を作ろうという意図が働き、まとまった形が積まれる造形的積木の段階、(三)ある一定の事物を表現しようとし、その意図が積木の材料までも決定する表現的積木の段階である。

この三つの段階は年令の増加と共に進んでいくものである。

組立てを行なっているうちに、積木の長さや高さや巾が同じである事の必要や、体積が同じであることの必要、また、二分の一の積木を二つ重ねて同一の高さになることなどを見出して来る。

幼児は、はじめに積み重ねようとするが、うまくいかない場合は、長くつないで堤防のようなもの、汽車のレールのようなものを作りはじめる。そしてその上に少しずつ積むことをはじめる。

そうかと思うと、がちがちにくずしてしまつて、全く新しい着想による幼稚園とか自分の住いなどを作ったりする。犬のはいる

穴があったり、便所を作ったり、煙筒を高く作ったりする。子どもの構成能力は手の筋肉の訓練と共に知的にも伸ばされていくことができる。子どもは積木で遊ぶ間に構成的想像と思考作用を練ることが出来る。一つの構成をなす場合偶然的、想像的、合理的の三つの段階が考えられるが、積木で多く遊んでいるうちにはじめは偶然的なものであっても、後には構成作用が次第に組織的となり、総合的構成力が発達して行く。

三、想像力の伸長

積木を積み重ねたり、くずしたりすることによって、幼児の想像の世界を満足させ、またそれを伸ばすことができる。幼児期の想像の時代であり、現実と想像の世界を間違えうくらいである。この想像力は幼児の精神発達を促すものである。種々の形のものを組み立てて、家、デパート、停車場、汽車、電車、バス、橋、動物園、学校、何でも子どもは似た形を作って想像をたくましくする。積木で足りない部分は想像によって、それを補うこともすぐできる。

想像はただ意識の中において作られるものではなく、積木や玩具などを機縁として作られ発展してゆくものである。想像は故なくして出てくるものではなく、積木などの組立ての形や動きや組み合わせによって、起され促されていくものである。想像力は推

理作用として働いてくる。積木を並べるのに何個並べたら良いか。またどの位の積木が必要であるか、直角三角形を合わせると正四角形になることなど推理力を練ることにもなる。

四、活動力の促進

子どもは本来活動的なものであるが、積木を積み、あるいはこわし、投げたり、ころがしたり、それを追うことにより、子ども本来の活動性を触発し、誘導し、活発ならしめる役立ちをする。

子どもは一人でじっとしていることはできない。母親などの相手を要求する。人間が相手のできない時に、積木は幼児の相手を十分になすことができる。何となれば幼児は積木の多変化性に興味を持ち、子どもの心理的満足をなさしめるからである。積木で遊びはじめると長い間飽くことを知らない。

細かい手先の運動は全身的な筋肉運動より幾分発達が遅れるので、はじめの間は巧みに組み合わせたり、高く積み上げたりすることはむずかしいが、次第に小筋肉の発達と共に巧緻性を増して来るようになる。

子どもは道具使用に次第に興味を持つようになり、想像によって素朴な積木を諸種の道具として使用しようとし、遊びは活動的となり、多方面への発展をもたらして来るのである。活動は心身の成長発達を助長する基本的な力である。身体的活動は同時に精

神的活動を意味するものであり、幼児にとつては特に重要なものである。

五、操作力の練磨

物の扱いを子どもは積木や玩具によって理解する。例えば長い棒は振りまわし、物をたたくことに用いられ、平たいものは、物の台に用いられ、丸いものは車としての作用をなすことを知る。押してみると平たいものは、なかなか進まないが、細長いものは、ふりがついて遠くまで行き、球の如きものは、何処へでもころがってゆく。同じ形のものにはレンガのように正しく積み重ねることができ、長い棒は柱としての作用をし、また橋のように二つのもの間に渡されたりする。長い棒は中心点を積木の上に載せるとバランスがとれて空中に支えられることを知る。むつかしい物理学の法則を、子どもは直接手で積木を取り扱うことによつて、その基本を学び取るのである。積木の形態により目的に副つた操作を理解し、目的々に使用することを知る。物にはそれぞれ違った用途のあることを理解し、その操作の仕方を学び知ることができる。たくさん積木を次の部屋に運ばせてみると、はじめは両手に一つずつ持ってゆくが、次には両手を合わせて中には喜んで持つてゆく。今度は左手を折曲げてその上に三、四個載せて、右手に一つもちその手で左手の上の積木が落ちないようにして運

ぶ。こんなことでは暇がかかることを知ると積木の箱のふたを裏返し、その上に積み重ねて持ち運ぶようになる。角と円筒と錐と球はどのようにして運んだら良いか。またどういう性質を持っているか、どう取り扱えば良いかということを理解することができるのである。実際の品物よりも積木は基本的な形をしているので、その区別が明瞭であり、操作の別も比較検討し得るのである。

六、弁別力の養成

積木により形の大小、長短、広狭、体積の大小、重量の差などを視覚と共に触覚によってなすことができる。弁別は知的な働きの中の最初のものである。スピアマンによると一般知能と諸種の感覚における、弁別作用の鋭鈍との間の相関係数は殆んど一、〇〇に近い、一致しているといっている。諸種の知的作業の基礎になっている一般感覚弁別と、全然一致するものであるということである。それで弁別力の検査は知能テスト問題として多く選ばれている。見るだけでなく、握り、動かし、投げ、ころがしたり、積み重ねたりすることによって、それらを明らかに弁別することができる。

積木の多くのものは着色してある。色の弁別をなすと共に色名を覚える。色の区別は早くから幼児にはできるのであるが、色名の記憶は遅れてなされる。それで積木の色は基本色を用いなければ

ばならない。形は異っても同じ色のものを並べさせたり、色によって分類して集めさせたりすると、子どもは色の弁別をなすことができる。後には家の組立てや壁や棚などを作るのに色の関係において、上下、左右対称など配色を考え、美的なものの構成をなすようになってくる。

七、表現力の伸長

子どもは自分の感情や意欲を何らかの形によって表現しようとする。言語はその大きな役割をなすものであるが、幼児には語彙が乏しく表現の形式がまだ不十分である。それで積木や玩具によって自己の意志を、子ども相応に表現する。嬉しい時は積木をたたくて喜び、悲しい時は積木を投げつけて泣く。愛情を示す時は積木を抱いて可愛がり、しゃくにさわるとなぐったり投げつけたりする。積木を紐で結んだり、紙に包んだり、テープの上に並べたりして、他のものを加えると子どもの表現力はますます巧みになり発展的となる。

ままごと遊びなどをはじめると、挨拶をしたり、買いものごっこを取引きのことを言い、想像的な物語をしたりして言語は活動を促し、表現力を伸ばし実質的ならしめる。

積木を媒体として、子どもの表現は自発的となり積極的となる。積木を高く積み上げると、これは東京タワーだといって、両

手をたたいて大声をあげて喜びの表現をなし、人に倒されたりすると失望したりする。

情緒的表現が積木を媒体としてよく行なわれるという点からして、遊戯療法や集団活動療法の材料として、積木が多く用いられるのである。積木を高く積んでいてそれを一度にくずしたり、積木を弾丸だといって投げつけたり、多面的に変化しやすいので、子どもの心理療法には良く用いられるのである。

八、人間関係の理解

子どもは一人で遊ぶ時よりも、兄弟姉妹や友だちなどと一しょに遊ぶ場合が多い。こうした場合積木遊びにより、人間関係を理解し、望ましい人間関係の樹立に役立つものである。

積木で遊ぶ時、幼い時は他人の持っているものを欲しがり、独占欲が強く自分で一人占めしようとするものがしばしば見られる。しかし兄弟や友人仲間と遊ぶ時は、お互いが譲り合ったり、順番を待ったり、交換したりしなければならぬことが当然起ってくる。積木遊びを媒体として、自己中心のままであればならぬこと、自己中心を脱却しなくてはならぬ訓練が行なわれる。

またある時は競争場面におかれる時もある。勝負けに対する正しい態度を、持ちなければならぬ。例えば、積木を高く積み競争をするような場合、常に自分が勝つてばかりいるわけにはいか

ない。とかく親は子どもに勝たせるよう工夫しているが、この態度はあまりほめるべきではない。負けた時には我慢しくなくてはならないことを学ぶべきである。子どもはこうした遊びの中において、人間関係の正しい在り方を学んでゆくのである。

ま と め

幼児の心身の発達を助けるものとして、積木の教育性について考案したのであるが、右に列挙した八つの項目はそれぞれ独立しているものではなく、実際の子どもの遊びにおいては総合されて働いているものである。子どもが積木で遊んでいる場合に、今は感覚の訓練に役立ち、次に構成能力の養成が見られるというものではない。一つの遊びの過程を考え方として八つの面からのサポートを当ててみたわけである。考え方に要素心理学的な見方にこだわっていると、しりを免れぬかも知れぬが、子どもの遊びは未分化的であり統一的行動である事には間違いない。また幼児自身が前に示した八つの目的をもって遊んでいるものではない。親や教師が極く自然的な子どもの積木遊びに対して、こうした教育的価値づけをもって指導理念を持って接する場合と、ただ積木を与えて遊ばしてさえおけば良い、という態度とでは、根本的に違うものがある。

— 幼児の教育に当って大切なことは、表面に教育理念をかざして

子どもにあたることをやめて、子どもは楽しく遊んでいるそのことを教育的に導いていくことである。教育してやっているという臭味が出ると、幼児教育は失敗であると思わなければならない。

遊具の代表的なものとして積木について考案したのであるが、他の遊具についても同じような事が考えられ、幼児教育に当っての一般法則として右に述べたことは考えなくて良いと思う。積木は手で取り扱われる。手即ち外にある脳髓の働きを行なっているのである。そうすると積木で諸種の遊びをしたり、または一定の法則的訓練を行うということは、脳髓の訓練を積木で行なっていることになる。積木は脳の体操をする器具であり、脳髓の訓練を行なっているのである。そういう観点から私は、基本型に立つしのみ積木を考案し、しのみ学園児に実際に実験的に実施してみたのであるが、それらについてここに述べる余裕がない。

大脳の訓練を積木で行なうことができるという観念に立っているのである。ややもすると積木くらいのものか、どんなものでも子どもに当てがっておけ、といったようにも考えられがちなこの積木が、幼児の知的発達の基礎を培っているものであり、心身相関による心身両面の成長発達に大きな寄与をしているものである、という価値の再認識をしなければならぬと思う。手は外にある脳髓であるからである。

(福岡学芸大学、しのみ学園長)

ガンバリの力を育てる

遊びと素材

(その二) 糸まき

清水 エミ子

前回のビー玉あそびは思いがけないほどの力を子どもたちから引き出してくれた。幼児の体の中にこんなにも無限にガンバル力がひそんでいるものかと、私は子どもを見るたびに神秘ささえ感じるような気がしたものである。そして次の素材、糸まきではどんな結果がみられるだろうかと胸をときめかせて、ダンボール一ぱいの糸まきを保育室に持ち込んだのであった。(家庭用の糸まき百五十個、職業用の大きいプラスチック型の糸まき五十個)

◎クラス全体の子どもたちがビー玉を経験していたので、

- ・何のこだわりもなく糸まきにとびついて来た。(これでも遊べるという安心感が全員にあった)

- ・糸まきを今まで全然知らなかった子が四、五名いたがかえって新鮮な気持ちで取り組んでいった。「自分の家にあるのもあいたらもらってくるね」と家の中のものにも目を向けるようになったようである。
- ・ビー玉とのちがい(素材によるちがい)を理屈でなく体験していた。

ころがり方、あそび方では子どもたちの取り組み方にビー玉とは質のちがったくりかえしとがんばり力がみられた。ビー玉と糸まきの組合せが子どもたちの中から、思いがけない力と発展を引き出してくれたのには、よろこびとおどろきを味ったのである。

いじってみる

素材をたしかめる。

◎ 大部分の子どもの家庭にあるもののため親しみがすぐわいたようである。

「先生この小さいのぼくの家にもあるよ」

「あたしんちのも糸みんなつかったらもってくる」などと言いながら、

◎ 手に持って眺めまわし、いじりまわし自分の家のと比較してみる。

「あたしの中の、こうゆうしるしじゃないよ」

「ぼくんちのはもう少しふといみたい」「こんな大きいのだとぼくんちのミシンにつかないね、あんたんちのは」と、ただいじっているだけでもこんなに子どもたちはいろいろのことを発見した。そして「先生、型のちがうのと木がちがうのがあるね、うちのはみんな同じだけど」とか、「この大きい糸まきの太さ、ぼくの手にちようどだ、ほらね」と手でにぎってみせ、そのにぎりごちのよさを知らせていたのであった。

◎ 糸まきの感触をいろいろなところでたのしむ。

片手で糸まきをぎゅっと握り、片手の手のひらにたたきつけて感触をたのしむ。にぎった糸まきをホッぺたにおしつけてみて、その



①

②



素材の感色をたのしんでいる。

手の上をころがしてみて、「くすぐりたい」と友だちにもしてみる。

今まで知らなかった子は、

◎はじめて知った糸まきのため、がむしゃらに何かやってみたくなつたようである。そしてしばらく他の子がいじるのを眺めていたが、そのうちおそろおそろ手を出してきた。

・手にもつたとたんに、いろいろのものに連想された。「先生これみてごらん」とビー玉の時もよろこんで取りくんだ、鉄也が私をひっぱりに来た。

ぼうえん鏡だよ

「遠くに見えるね」(写真①)

鉄也は両手で大きい糸まきを握りしめ目にあて、そして「先生、望遠鏡だよ、よくみえるよ」と大よろこびである。私も思わずまねて眺めた。鉄也の仲よしの昇もさっそくまねていた。そして

「よくみえるけど遠くにみえるね」とのぞいただけでひとつの発見をしているのである。これを近くでみていた正樹が

「小さいのだとほんものより小さくみえるよ、やってみな」と鉄也と昇に近づいて来た。そしてそれぞれ持っていた糸まきを交かんして眺め「ほんとだ、なんでだろう」「小さいのでみるから小さくなる、

んじやないの」など目にあててははなし、くりかえし、室の中のいろいろのものを眺めていたのである。そして一回眺めるごとに

「あっ、あの人小人みたいにみえる」「近くのをみるとみんなみえないでちつとしかみえないよ」などおとな顔まけの発見をしていくのであった。

たつた目にあててみるだけで糸まきは、「なぜだろう」と子どもたちに考えさせ、いろいろくりかえして解決を与えてくれるのである。(写真②)

長い望遠鏡になった

何回もいろいろなものをのぞいていた鉄也は、大きい糸まきを三個つないで持とうと、頭をしかめて糸巻きにちょうせんしはじめた。昇が「何やってるの」と聞いても見向きもせず、小さい指をいろいろにうごかして持ちあげている。そして落としては持ち、落としては持ち、文字どおりガンバリはじめた。そしてやっと両手で交互に糸まきを重ねて持ち、「ほら長いぼうえん鏡になった」とうれしそうにのぞいて歩きまわっていた。この発見は男児も女児もよろこんでまねてくりかえされた。ぶ器用な勝あきはくりかえしならなかなかできず、しまいに涙を浮べ、とうとう持つことができたのである。

かたのところであたく、タイヤになるよ

このような男児のいろいろのあそび方をみながら、手の中に大きな糸まきを入れてなぜまわしていた久美子が、肩の上に糸まきをのせ、つづみを打つまねをしながら「ほら、肩のところで叩くとたいこになるでしょう」と叩いてみせた。「ああそうゆうのテレビでみたことあるよ」などと言いながらまねる子もでてきた。

ころがしてみる

◎前に経験したこと（ビー玉）を活用してみる。

ころがるでしょう

がむしゃらに素材に進んでいく清は「ころがしてあそぶんだよ」と私のまわりに次々に糸まきをころがしはじめた。

・ころがるでしょう。

きょうそうさせようところがる先も見とどけず、次々に投げるように床にころがしている。そしてカチンとぶつかる、と、「ほら、ぶつかった、まがったからだな」などとひとりごとを言いながら箱がからになるまでころがしていた。

こびとの国の自動車工場

清のころがすのをみていた仁が、大声で「わーこれこびとの国の自動車工場だ」と言いながら足もとの糸まきをころがした。

そのことばにつれて、室にいた子は全員といってもよいほど床にこしをおろして、ころがってくる糸まきをころがし返したり、ねらつてあてっこしたりはじめたのだ。室中糸まきだらけになってしまった。そしてこびとの自動車の交通整理がでて糸まきのころがしかえしをしていた。この時こどもたちはあそびながら、ビー玉と同じところとちがうところ、を発見し、たしかめていたりした。

・糸まきもまっすぐころがらない、カーブしちゃうね。（ビー玉と同じ）

・ぎゅっところがすときりきりまいになっちゃうね。（ちがう所）

・力入れてころがさないとすぐとまっちゃう。

・ビー玉よりもよく命中する。

など糸まきの性質をたしかめている。

このたしかめの期間は三日位で終わった。そして次にはすぐいろいろな遊び方に発展していったのである。

ころがしきょうそう

◎ふたついっぱいころがす。

ふたつをならべて持ち、いっしょにころがす。

・同じにならないことを発見。

・いっしょにころがるように持ち方・ならべかたをいろいろに考えてころがしてみる。

・床の目にあわせてころがすと長い距離いっしょにころがっていくことを発見した。

◎坂をころがす。

・積木で坂をつくり、すべりころがす。

・ふたつならべてころがし競争をする。

・積木から落ちたらまげ。

・遠くまでころがった方が勝。

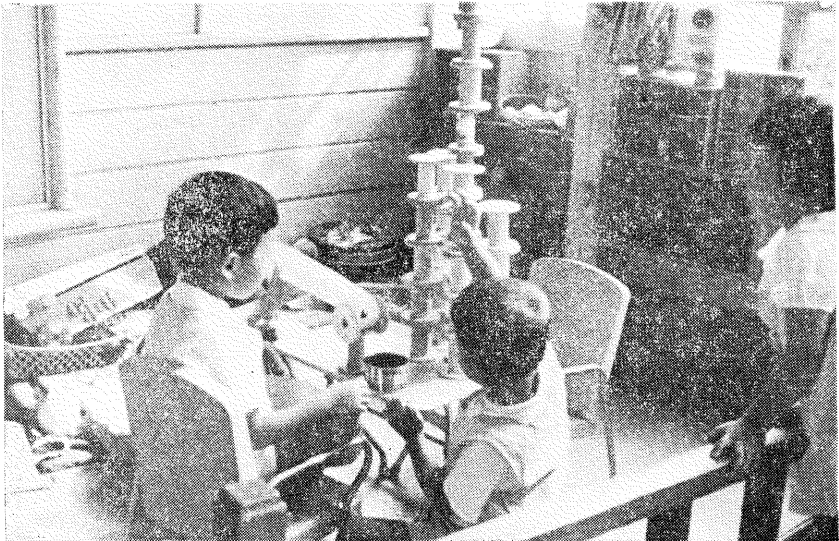
・早く下についた方が勝。

などのルールがあそんでいるうちにきまり、応援の声もだんだん大きくなって長時間あそべられた。

下からおしあげる

ころがしつこの終りころ、下でころがっている糸まきをひろっていた広が、くたびれたのか、下から力いっぱいおし上げた。するとその糸まきが調子よく坂をいっきにのぼり向かいがわにころがり落ちたので、これを見ていた子は思わず手を叩き、「のぼった、のぼった」とかん声をあげた。広のおうちやくが思いがけない遊びの発展を助け、だれかけた遊びをもりあげることになったのである。

③



◎長い坂をのぼらせる。

広のなげあげにしげきされ、それぞれがいろいろの高さの坂を作
って、下からおい上げてあそんだ。

・途中でおちる。

・下の方からころがりおりてくるなどの時は舌うちをしてくやし
ったり、糸まきにつばをつけておまじないをしたりしながらおし
上げ方をいろいろかげんしてくりかえしたりした。そしてうまくのぼ
っていった糸まきがあると、「のぼった、これぼくの糸まきにきめ
た」といってクレヨンで印をつけたり、糸まきにおじぎをしたりす
るのがみられ、思わずほえんでしまった。そして、子どもたちの
夢中になる姿に圧倒されて、ただ眺めている自分に気づく時をもつ
のであった。

かさねる

高くつむ。(写真③)

「あたし七個だったよ」「あたしまがったのなおそうとしてこわれ
ちゃった」と純子と由美子が今まで聞いたことのない大声を出して
いるので近づく、糸まきを積木のようにたてに積み重ねている。

・きちんと重ねないとくずれぬ。

・まがったのなおす時は、そっとやらないとだめ。

などを発見し、まわりの子にもやらせてみたり、私にもやってみ

ろと進めてくる程だった。

いろいろの型につんでみる

「先生、ちょっとでいいからぼくにこの糸まき全部かしてよ、すぐ
かえすから」

と清がまじめに頼んできたので「どうぞ」と言うと、うれしそう
にままごとコーナーに箱ごと持ち込み、いろいろの型に積みはじめ
た。全部の糸まきで何がつくれるかやってみたかったのである。

・東京タワー

・ビルディング

・工場

などが次々につくられていった。東京タワーができた時、まわり
でみていた四、五名がスツとコーナーに入って手伝いはじめ、十五
〜二十分、いっしょに糸まきの積木をたのしんだのである。この
時、あとから入っていった子どもたちはどの子も無言で入っていっ
たにはおどろいてしまった。

・たしかめくりかえしてあそぶ素材は、子どもたちの心を結びつける
力を持っているということを強く感じた。

・こんな時、いれてとか、こやろうか、ということには必要ではな
くて、かえってことばが雰囲気をごわすこともあることも知らされ
たのである。

まっすぐな所でないとかずれる。

「どうして四個重ねるとくずれちゃうんだろう、しゃくだなあ」「どらやってみよう」と他の子がたしかめ、やっぱりくずれるのでふたりに首をかしげてふしぎがつていると、「机の上でやってみな、まっすぐのところでやれば」とふたりのあそびをみていた女児がひき込まれるように口を出した。

机の上につんだ糸まきは八個も積むことができたのである。

ひっぱる

他の材料を持ちこんであそび出す。

ひっぱりあるく

毛糸のくずを糸まきのおなかに通して結び、それをひっぱって室の中をあるきまわり「これ車ね、オーライ オーライ」とひっぱりあるいていた。そのうちこの糸まきのおなかにキャラメル空箱をはさみ込んでリヤカーだよ と言いながらままごとの野菜や小さなおもちやをつんでひっぱってあるいた。

ひきよせる

これを見ていた正光は紙ひもをゆわきつけ糸まきのお腹にまきつ

け、ころがしてのばし、それを次に思いきり力を入れてひきよせている。ヨーヨーのようにひもがまきついてひきよせられることを希望んだらしいのだが、これはなかなか成功せず、ずいぶん正光をいらさせたようである。あまりねばり強くない正光がかなり長い時間くりかえすことができたのである。この時は途中でタコ糸と変えてあげたのであるが、途中まではまきつくのだが、なかなか全部はまきつかなかった。すると「ゴムでやったら成功するかな」と正光はゴムをつけてやってみたが、これはとうとう成功しなかった。

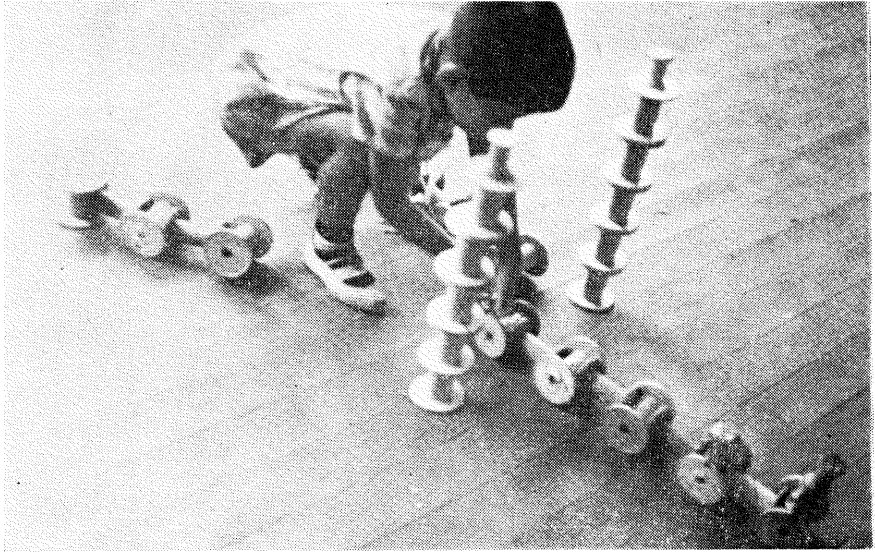
しかし、このような素材は成功しなくても劣等感になつて、残らず、これでもか、これでもかと素材にちょうせんしていく態度を育ててくれることを知らされた。ねばりのない子が素材にいくついてもいくついてもこのよこびを味わうことができたのである。

たおしたり、あてたり

まとあて

大きい糸まきを的にして小さい糸まきであててたおす。この時的にする糸まきには動物の絵がかいてはりつけられたり、おかしの絵がはられたりした。ビー玉の時の射的あそびが材料をかえてくり返し、ためされ、あそばれたのである。

組みあわせたり、つなげたり



・ひょっとしたはずみが大発見になる。

同じ大きさの糸まきをたてよこ交互につなげて、構成あそびが進められた。「先生来てみー来てみー」と何事がおきたのかと、びつくりするほどの大声で昇が私をひっぱりに来た。「ほら、つながっちゃった」と机の上に十ヶの大きい糸巻きが交互につなげられているのを指しながら「のぼるね、こっちの手とこっちの手と、一個ずつもってバチンてぶつけたんだよ、そしたらくっついちゃったの、よこむきとたて向きに」とこれ以上目が開かないと言うほど目を見開き、顔をまっかにおどろきとよるこびで私に伝えるのだった。

昇は自分が無意識にした行動が思いがけない結果になったのをおどろき、よるこんでいるのである。そして近くにいた友だち男女をとわず、やってみることをこうふんしてすすめたのである。「やってみ、こうなるよ」と

汽車ごっこ(写真④)

・つなげた糸まき(大)を床や机の上をはしらせてあそぶ。

・その汽車に小さい糸まきで煙突やおかまがつけられ(セロテープではりつけて)煙突の上にはビー玉の煙がついた両用紙で運転手がのせられたりした。

このあそびは男児全員がよろこび、大きい糸まきのうばい合いが三、四日つづけてみられるほどだった。

トンネルや交通整理のおまわりさん

糸まきだけで作ったとんねる。

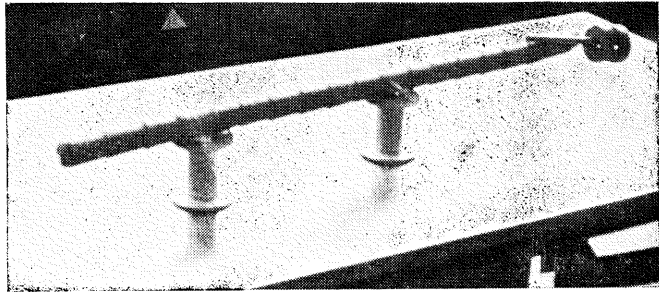
長くつないだ糸まきを両手にはきみ、左右からそつと内がわにおすと、糸まきはやわらかいカーブで山形になった。そこで、それを床に立てて、トンネルにし、たおれないようにテープで床にはりつけた。そして糸まきの大小くみ合わせた人間を作り、画用紙の顔をつけておまわりさんをたてたりした。

動物

汽車ごっこで糸巻きのくみ合せをたのしんだので、何か変化のあるくみ合せがしたいと男の子たちはねかしたり、たてたり、ななめにしたり、いろいろくみ合わせることに努力しはじめた。はめ込もうとしてはまらなかつたり、のせようとしてのせられなかつたりすると、手で机を叩いてくやしがり「チキシヨウ」と声にまで出してやりなおすのである。こんな時は、今なげだすか、今なげだすか、と思いつながら心の中では、がんばれ、もう一回もう一回、と応援する。そしてこんな時子どもたちの口からとび出すチキシヨウやチェッなどは、けつして悪いことばではない、かえって心からのくやしきや無念きの表れが思わず口をついて出るのであるから、これがとび出す方がかえって子どもたちが夢中になっている表われではない

が、がんばろうとしているのだとさえ感じるので。そしてがんばるぞのかわりのことばのようにさえ思えるのである。昇はのせてはくずし、はめてははずし、を何回もくりかえしているうちに「先生これ何だ」と言つて私の前にくみ合せたものをそつと持つて来ておいたのである。「汽車でもない、なんだろうな」と言うのと、「キリン」と、とくいそうに私を見あげたのである。しばらくして鉄也と康弘が「ぞうができたの」と呼びに来たのでいってみると、画用紙のなをつけたぞうができていた。

「先生、はなはどうやっても糸まきじゃできなかつたよ、体だつてすぐくずれちゃつて、やつとくずれなくなつたの」と言つて、ぞうとキリンのまわりを行つたり来たりするのである。そのくりかえしの苦勞が察せられ、私はそつと戸棚の上のせ「ぞうとキリンにぞちぞうしたくなつちやつた」と言うのと女兒がままごとコーナーからぞちぞうを作つてもつて来て、たべさせたりした。こんな時の子どもたちのかおの輝きや自分の作つたものにほれほれしているようすをみると、何か子どもなしに完成したおとなを感じるのである。ためいきをつきながら、「ここんとこなかなかできなかつたよ」といつてさわつたり、「はなはどうとう糸まきじゃだめだつたな」となまいきなしぐさで画用紙のはなの形をなおしたりしている。これまでの遊びでは主に糸まきだけで遊ばれたあそびであつたのだ。ここまで素材がたしかめられると、子どもたちは前に経験したあそびに



⑤

応用していきたがるものである。

ビー玉あそびとくみ合わせてあそびはじめたのである。

△おもちゃを作る▽

ビー玉と組合せ

ダンブカー

大きい糸まきに写真のように画用紙でトヨのようなものをつけ、

その中にビー玉をいれて糸まきをころがすと、ころがる拍子に画用紙が上にもちあがり、ビー玉が外にころがりおちる。これは五、六名がビー玉をたくさんのおせ「ジャリトラなのね、ダンブだよ」と十分位夢中になってあそばれたあそびである。これにしげきされて、

女児が小さい糸まきの人形を作
り、床の上にて「交通事故なのね」と言うと、他の男児がおもちゃの自動車を救急車に見立てて、とんでくるなど、思いがけないあそびに発展したものである。

このあそびを見ていて私は、子どもたちは自分たちの身近なできごとを親しみやすい素材によって再現していくのだな、と感じた。

おとしあな

ダンブカーごっこでビー玉がなくなり、たった一個しか持っていないなかつた正一が、はじめ不満気に室内をビー玉を探しながらあるきまわっていたのであるが、そのうちあきらめたように大きい糸まきを画用紙のとよの両はしにつけ、その上に一個のビー玉をころがしていた。片手をさげすぎてビー玉をころがりおとしてはひろってやりなおし、しているうちに、画用紙のとよに二つ三つの穴をあけ、そして両手を上下しながらビー玉を穴からおとして楽しんだのである。穴のわきには十点と二十点と点数がかき込まれていた。

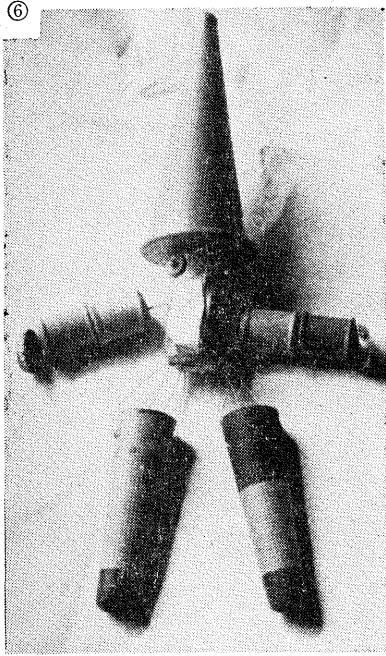
このようすをみていて私は、子どもたちにはたまには材料のたりなきを経験させることも必要だと感じた。たりない、少ない素材が子どもたちに考える力を与えてくれるし、その考える力がすばらしい創意をひき出してくれる。こんな時、子どものエネルギーはフルにつかわれるものだということを知らしたのである。

いつたり来たりのおすべり台

ビー玉と組木との組合せ。

「ビー玉っていうんな高さでころがすとおもしろいね」と机の上に画用紙のとよのついた糸まきを立ててころがしていた孝教は、糸ま

きを重ねて高くしてころがしていたが、「このくらいはいきおいな
らかえってくるぞ」と画用紙のとよの先に組木を取りつけ、ころが
してみる。高すぎていきおいあまって通りこしたり、低すぎて途中
でとまったり、そのくりかえしは見ている私でさえもう止めたら、
と思うほどである。そして二十数回めにやっと画用紙のとよの上か
ら組木の板の上までころがり上っていったりきたりするおすべり台
ができた。この時、孝教は「世界中探せばきつとこう言うおすべり
台があるね、ぼくそれがすべりたいんだよ」と言いながら、くりかえ
しビー玉をころがしている。糸まきをつんだり、はずしたり、立て
たりねかせたり、同じようなくりかえしの中に孝教は少しづつ、変
化と成功へのみとおしをつかみながら、そして自分がのってみたい

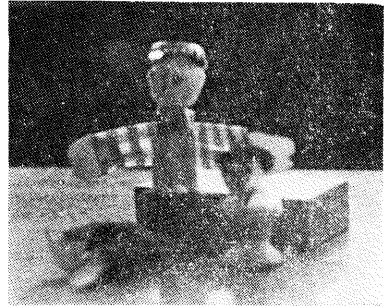


「いったり来たりのおすべり台」を完成させた。組合せや遊びは単
純であっても、そのあそびの過程にあふれるような努力とくりかえ
しがひめられていることを知らされた。子どもたちは、このくりか
えしの成功感の中に学理的な理屈があることなど知らずに、その原理
を体得している。おとなになって、このくりかえしが何らかの型で
みることを信じさせてくれたのである。

戦争ごっこの機関銃(写真⑤)

工業用糸まきと木の大型糸まき。

工業用ボール紙の円すい型の糸まきを長くつなげ、その横はらに
木製大型糸まきをセロテープではりつけたものである。勝明は「バ
パン……」とひとりごとしながら糸まきをつなげていると清が
やって来て「勝ちゃん半分かしてくれ、そして戦争ごっこやろう
ぜ」と話しかけた。「うんやろうぜ」と話しはまとまり、機関銃、
大砲のうち合いがはじまった。これを見ていた他の数名も無言で機
関銃のうち手にまわったり、うたれて倒れる役になったり、室中た
いへんなさわぎになり、女児から「うるさくって」と苦情がでたほ
どである。そして帰りにはきまってだれかが「ぼくの銃砲こわさな
いでね、あしたやるから」と言ってくる。大積木で鉄ぼう置場まで
室内に作られた。そして「おもちゃのより大きくていいね」と話し
合っていた。長い鉄ぼうにしがみついている子どもたちを見て、子



どもたちは遊びたい気持ちに合せて材料を使っていくのだな、と感じたのである。

人形をつくる（写真⑥）

明子は登園してきてから三十分もの間じっと糸まきを使って何かを作っていた、まわりでいろいろなあ

そびが展開されていることなど、いっこう気にならず、もくもくと製作しているのである。数々の糸まきに糸をおしたり、セロテープをはったり、マジックでかいたり、ぶるぎやてみたりしている。そして、私の前にもって来てみせ、「つるしてね」とただ一言いっただけである。その創意のすばらしさにしばらくみとれてしまった。私がこの人形を部屋につると数名の男女がしげきされたのか、「先生糸まきに色ぬってもいい」と聞いて来た。「どうぞ」と言うと、次々に写真⑦のような人形を作ってもって来た。できあがった人形を手にもって「こんにちわ」とか「あそびましょ」など人形劇のようなあそびがはじまった。また、ままごとのフトンの中になかせてあかちゃんにしていた女兒もみられた。こんなことには用

いないだろうと思われる（おとなの考え方）ことがらを子どもたちはつきつきに私の前に展開してくれるのである。そして、その環境がしげきになり、次々に子どもたちは素材の上に個々の持ち味を表していくのであった。

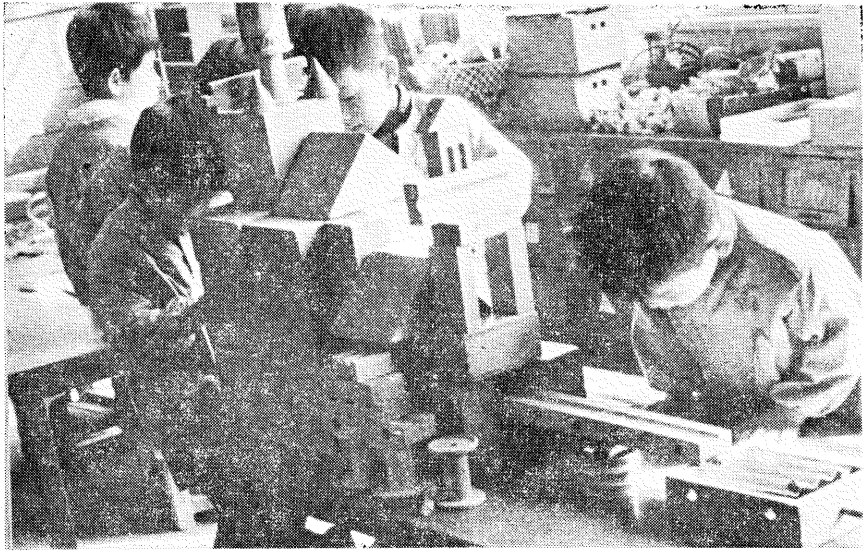
ゲームあそび

ゴルフ

糸まきを立てておき、その上にゴムのボールをのせ、シンブン紙のクラブでうつのである。園庭のそこに糸まきの台がおかれ、スポンスポンと新聞紙をまるめたクラブでうつ。大きくとんだボールをおいかける顔、からぶりしたり、糸まきをたたいたりして失敗を考えこむ口惜しそうな顔が入りみだれ、キャーキャー大きわざであそびたのである。どっちがとぶか、何回あたるかなど、ルールがきめられていたり、ひとりいろいろなふりかた、たたき方を工夫して、くりかえしたり、いろいろであった。が、くりかえして発見し、発展していくとゆう過程がはっきりみられたのである。

糸まきおし

糸まきをよこにし、床におき、新聞紙を細く棒状にかため、その紙の棒で糸まきのおなかをおしてころがしていく。紙の棒のため力を入れすぎるとおれてしまったり、棒のあて方でとんでもない方向



にまがったり、目的地をまわろうとあせってもいっこうに言うことをきかなかつたり、その真剣な顔は何とも言えないほどひきしまっているのである。応援する子どもたちも、「もっと右々」「もっとそっと」「もっとまん中」とじっとみつめながら応えんしている。

このあそびは何回もくりかえされ、ひとりだけでそっと廊下で楽しんで練習したりされ、長期間あそびれたあそびであった。

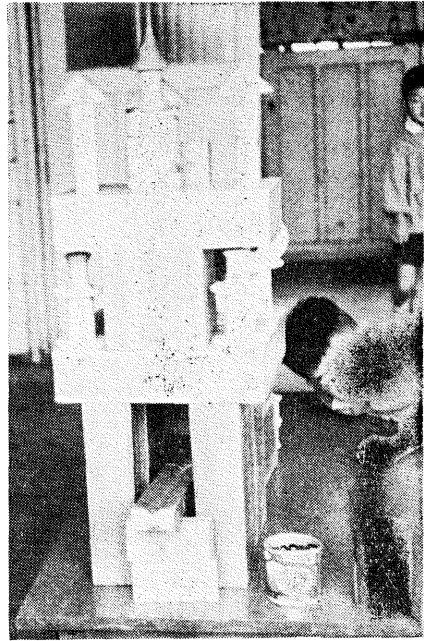
このあそびの第一回目の後「みてるとやさしいと思うけどやるとやれないね、こっちむき、こっちむきと思ってもちがう方にいっちゃうね」などと話し合われ、子どもたちが全力で糸まきにちょうせんしていたのである。ひとりできりかえし工夫し、がんばることのねばりと楽しさを教えられたあそびだと思われる。

構成あそびの補助材や装飾品に

ビー玉と積木と組木。

「オーイ、ここ宝島みたいにかぎりなね」「おっけい、まだビー玉ころがさないでくれよ」「あたりまえ、これはまほうの階段だから、できてからにするよ」

こんな会話が聞かれてきたので、私はすい込まれるように室に入っていくと、机の上に組木のおすべりを作り、そのまわりを床上積木で構成し、その所々に糸まきがおかれている。もちろん、すべり台の台にも糸まきを使い、文字どおり宝島ができあがりかけている



のである。その積木のところどころにつかわれた糸まきが非常にリズムカルにむだなくつかわれている。子どもたちはこうやって、作り出す美しさを知っていくのだなと思った。「そこにそれおくとおかしいよ、その下においてごらん」とか「ここはこの積木より糸まきにしよう」など美しさと造形のリズムもちゃんと表現しているのにはおどろかされた。そして子どもたちの底知れないエネルギーとがんばる力、そしてがんばりながら遊びや考えを発展していく可能性を知ることができたのである。(写真⑧⑨)

私はこの糸まきの素材と子どもたちの活動をみていて

・ビー玉どちがうくり返し方をしていた。(きまっただ型) によるくり返し子どもたちにこれほどまでいろいろと考えさせ、がんばらせてくれた。

・素材によって男児と女児のあそびの発展のさせ方のちがいが、創意のちがいを知ることができた。

・子どもたちが素材に対して、たしかめていく過程にビー玉と同じものがある。

・ころがす、おす、ひっぱる、おとす、たおす、などがあることを知った。

・ビー玉と糸まきの素材で子どもたちががんばる力とくりかえしの効果を体験し、そのくりかえしの中にその素材素材によって質のちがう失敗を与え、それをこくふくしようとする力強いがんばりの力を見ることができ、いろいろの失敗といろいろのがんばる力(くりかえしを)与えることがいかに必要であり、大切であるかを感じ、これから与える空罐や紙のボールでの経験が楽しみで早く子どもたちの前に出してみたくてたまらないのである。そして子どもたちのきんちょうした顔と素材を思い浮かべるのである。

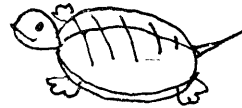
(足立区立関屋幼稚園)

*

*

幼児のためのよいお話

本 田 和 子



はじめに

「赤い自動車があります。特急こだまがあります。黄色いバスもいます。ブルーのコロナにはMちゃんとパパとママが乗っています。」

自動車の絵本をみながら、2才8ヶ月のMはこんな「お話」を創作した。Mはこの行為を「読む」と称している。したがって、Mの「ご本読んで」という要求には、このような応じ方が必要とされるわけである。絵本に附されている解説、例えば、「特急こだま。はやいはやい、フルスピード。風を切って走ります。」というような文章を読んでやっても、Mは不満そうに、「もっと読んで」をくり返すのであ

る。Mにとっては、描写や叙述は殆んど不要であって、必要なのは「事実を全て知的に羅列する」という手続きであり、想像の入り込む余地は僅かに自分たちを画面に入れこむことだけなのである。

絵本に対するMの態度は、余りにも見事に、児童心理の教科書的であって、改めて「発達段階とは何と軽視し得ないものであることよ」との思いを深めさせられるのである。したがって、Mの好む「お話」には次のようなものが多い。

「Mちゃんとパパとママが汽車に乗りました。蒸気機関車で、ポーツ、シュッシュュッシュュッシュュッシュュッガッタンゴットンガタゴトガタゴト。トンネルをくぐります。ポ

「シューシューシューシューシュー。」 或いは、「みんなでバスに乗りました。Mちゃんとおババとママとです。『みなさま』の観光バスでした。プッププップー。コーストップが赤になりました。とまってください。赤ですよ。バスはとまりました。よかったですね。」

さて、「好むお話」という表現を先に用いたけれど、Mくらいの幼児の生活の中に、多少なりともまとまった「お話」は、比較的入りこみにくいものである。絶えず動き、移り変わる興味のままだに、短かい、しかし類似した遊戯活動を積み重ねていくのがMの一日であるから、Mの心的な構えが「お話」を聞く態勢をとるのは、極く限られた場合にしかあり得ない。それは、主としておひるねとか、夜の就寝時とかのひとときであろう。それ以外には、絵本をみながら、或いは絵を描きながらの、補助行為として受け入れられる場合が多いのである。

したがって、好むも好まぬもなく、Mくらいの幼児にとっては、先にあげたような「お話」が、生活の中に入り込み、子ども自身とかわり合いを持つ唯一のものである、とも言い得るのである。

このような状態を改めてみつめ直すならば、「幼児のためのよいお話」を考える場合に、そのお話の内容とか構成を検

討する一步前の段階として、その「お話」が提供される際の姿を考えてみる必要を感じさせられるであろう。つまり、その「お話」がどのような機能を果たすものであり、その「お話」を受け入れることが、幼児の活動の形態としては、どんな種類に属するものであるか、という事から考えを進めていかねばならないのである。

「お話そのものが楽しまれている」場合と、「他の活動の補助材料としてお話が用いられている」場合とでは、「よいお話」の基準も自ずから異なってくるであろうと思われるからである。

以上のような観点から、まず幼児の生活と「お話」との関係の持ち方を明らかにし、その上に立って「よいお話」の選び方を考えてみようと思う。

(1) 幼児の生活と「お話」

2才から6才までの対象を、幼児という一括した名称でぶことに、そもそも無理を感じるのは私ばかりではないであろう。かりに、幼稚園児というように対象を限ってみたところで、満3才～6才までの、発達のみにてかなり異なったレベルの子どもたちが一まとめにされるわけである。この幼児たちの生活形態は、各々の段階に応じた異なりを示すので

あるから、当然、この生活と「お話」が関係を持っていく場合、その関係の持ち方は発達に応じて異なったものとなるであろう。

まず第一の段階 2、3才児と「お話」との関係は次のように把握することができる。

① 幼児の経験を「ことば」で整理するために「お話」が存在している。

絵本をみるという視覚的経験、或いは飛行機の音を聞くという聴覚的経験、これらに対して、「ことば」を用いてなされる説明が、「お話」の形態をとっているわけである。

「ホラ、飛行機がとんでるのよ。ブーンブーンって。今日はお空が曇っててよくみえないわね。でも、きつと〇〇の方へとんでいくんでしょうね。お天気の日だったら、青いお空に、銀色のつばさがヒカッと光ってみえるかもしれないわね。ホラ、まだ聞こえてますよ。ブーンブーンって。」

この例は、爆音を聞きつけた3才児に、短かい「お話」をしている保育者の姿である。こんな「お話」は幼児との生活の中に随所に見出されるものであろう。そして、このタイプの「お話」は、対象の年令が幼ないほど、生活の中で大きな比重を持っているのである。

2、3才の幼児たちにとって、ことばだけが組み立てる抽

象的・観念的な世界は、まだ緑の遠い存在である。この子どもたちにとって、具体的に経験し、接触した世界に名称を与え、さまざまな現象を一括し、整理してくれるものが「ことば」なのであるが、「お話」もこのような機能を帯びたものとして存在しているのである。

この時期の幼児たちにふさわしい「お話」として、「赤ちゃん話」とよばれる「身边童話」や「今、ここ話」とよばれる一連の童話があげられている。「今、ここ話」とは、本来は一九二〇年代のはじめ、アメリカ合衆国において、ルシー・S・ミッチェルという女性によって主張された童話理論であり、それに基づく作品を指すものである。ミッチェル夫人の主張とは、次のようなものであった。すなわち、5才以下の子どものために「今」の世界について話す「お話」が余りにも少ないという事実を指摘して、「今」、「彼らの生きているこの世界」に関する物語を提供しようというのである。そして、ミッチェル夫人は、子どもの活動をテーマとし、子ども自身の使うことばによって、「お話」を創作することに努力したのであった。

ミッチェル夫人及びその弟子たちの作品に対しては、その後、さまざまな疑問や批判が投げかけられている。「今、ここ主義者」による「今、ここ話」には、余りにもプロットが

なすぎ、子どもたちに何の楽しみも、何の笑いも与えない
というのである。確かに、

「子どもがおもちゃを持ってかいだんをおります。ピタン、
ピタン、ピタン、ピタン。一段一段おります。子どもはお勝
手にはいります。お母さんがおります。お母さんは子どもに
おかしをくださいます。」というような「お話」は、「三匹
の小豚」や「七匹の小羊」のように充実した筋を持たず、何
らの事件をも含んでいない。「お話」を楽しむ構えのできた
子どもたちの心をつかまえる力は、とうてい持ち得ないであ
ろう。

しかし、「お話」が、「今、ここ」で子どもたちが経験し
たことがらを、説明し整理する存在として、子どもと関係を
持っている場合には、この「今、ここ話」が、最もふさわし
いタイプの「お話」として浮かび上ってくるであろう。

このタイプの「お話」では、幼児の経験したことがらが直
接的に内容としてとり上げられていること、その表現は、叙
述的表現よりもむしろ擬音や擬声を使用した絵画的表現であ
ること、くり返しがあること、短いこと、などがそなえるべ
き条件としてあげられるであろう。そして、使用されること
ばは、適格に事実を指示するものであると同時に、ことばの
ひびきとして美しいもの、無駄のないものであることが望ま

れるのである。

②幼児が保育者の存在を身近に感じ、それを確かめるため
の材料として「お話」が存在する。

3才になったばかりのKが激しく泣き出した。大好きな赤
いクレヨンを隣のSが使って折ってしまったというのであ
る。Sが慌てて返してくれた折れたクレヨンを手にとろうと
もせず、いつまでも泣きじゃくっている。保育者がそっと、
Kの隣に坐って、Kの肩に手を廻した。そして、折れた赤い
クレヨンをもてあそびながら、小さな声でささやくようにこ
んな「お話」をした。

「おやおや、赤いクレヨンさんが二つ出てきましたよ。『K
ちゃん、今日は』ってこっちの少し長いのが言ってますよ。
こっちの短いのはね、こっちの妹なのよ。『Kちゃん、あた
し、小っちゃい赤ちゃんよ。仲よくしてね』って言ってます
よ。クレヨンのお兄さんと、妹と、二人でKちゃんの所に来
たのね。」

いつの間にかKが泣きやんで、保育者の左右の手に握られ
た折れたクレヨンを見ている。やがて、そっと、折れた二本
をKは手にとった。

この例は、3才児のグループで観察されたものである。こ
の場合、Kは、保育者の「お話」の内容にも心を動かされた

であろうが、それ以上に、身近かに坐ってくれ、低いやさしい声でささやき続けてくれた保育者の存在が、興奮した心を静め、落ちつかせるための最大の要因であったとみてよい。そして、低く、静かにささやかれる「ことば」が、保育者の存在を身近かに、そして確かなものとして、さらに自分自身のために存在するものとして、その幼児に感じとらせるための役割を果しているのである。

この傾向も、対象が幼ないほど多くみられる。

この場合の「お話」は、内容は殆んど問題にならなくなってくるであろう。むしろ、「話し方」と、その幼児に対する保育者の態度如何が、その「お話」を生かすこともでき、殺すこともできるのである。

③幼児たちが「お話」を聞くことを楽しむ。そしてことばで構成された観念の世界に遊び、現実には経験し得ないさまざまなことがらを、ここで体験する。

この段階に到達して、はじめて、多くの物語や文学作品が登場するわけである。年令的にみて、4才の後半から5才にかけて、徐々にこの傾向がみえ始め、5才代から6才にかけて物語を楽しむ態度がより深まってくるのである。

この時期には、つまり「子どもとお話」の関係が、はっきりと「人間と文化財」の関係として成立したこの段階では、

「お話」の「文化財」としての価値が十分に検討されねばならないであろう。

幼稚園や保育所で、幼児を対象にしてなされている「お話」の性格を分類してみたとき、「何かを伝えるために」或いは「何かの説明の道具として」、さらに「ある活動への導入として」、用いられる「お話」の比重が余りにも大きいのに驚かされたことがある。もちろん、「お話」は、これらの機能をも備えているし、これらの目的にもよくかなうことができる。しかし、子どもの側に、ある段階を経てやっと到達した「物語を楽しむ得る素地」が用意されているとき、これを無視した「お話」の扱われ方が、余りにも安易になされすぎている現状に、問題を感じさせられるのである。

「お話」を、「ことばによって組み立てられた文化財」と考へて、言語文化財に対する感受性をより豊かにより高いものへと育てていく努力を、怠ってはならないのではなからうか。

(2) 言語文化財としての「お話」

幼児期に与えられた童話の種類が、将来の読書傾向をどの程度まで決定するのか、果たして直接的な影響があるのか、ないのか、これは未解決の課題である。しかし、子どもをと

りまくことばの世界が、豊かで美しいものであり、子どもの興味を十分にひきつけ得るものであった場合に、その子どもの抱くことば及びことばで組み立てられたものへの愛情と関心が、より強められ、より深まるであらうことには、疑念の余地がないのである。

幼児に与えられ好まれるよい物語の基準として、原則的には次のようなことがいわれている。

まず、

①よく企てられた筋をもつこと。

②物語の展開のスピーティなもの。

③子どもたちの生活感情に身近かでありながら、想像力を存分に働かせ得るようなもの。

④リズムミカルなもの。

⑤感情の豊かさを育てるようなもの。

⑥ことばの環境として正しく美しいもの。

などである。

しかし、特定の事件も起らず、スピーディに展開する筋も持たない物語でありながら、子どもの心を巧みに把えるものもあり得るし、心の豊かさを育てる上から是非与えたいと思われるものも少なくない。「よいお話」を選ぶ場合、「よい」の基準がなかなか難かしいのである。

そこで、私共は、まず広い範囲から、さまざまな種類の物語を選び出し、そのひとつひとつを検討してみるといふ努力をせねばならないであろう。そして、さまざまな種類の物語の持つ異なったまよや美しさを究見せねばならない。子どもの心の世界の拡がりや深みを育てるのに有効だと思われる要素、子どもの行為を望ましい方向へと改変させるための働きかけが可能だと思える点、或いは子どもを存分に楽しませ、子どもに愛されるであろう部分などが、思いがけなく見出されるものである。これらの物語は、童話として、少なくとも、「一つの価値」は備えているわけである。これらの物語が、子どもの生活感情に照らし合わせてずれのない物であり、与えるおとなの感動をも誘うものであるなら、それは「よいお話」と考えてよいのではないであろうか。

最近話題になった創作童話「いやいやえん」は、まずおとなの心を把える作品であろう。子どもの世界が突にユーモラスに微笑ましく描かれていて、読む者を楽しくするのである。しかし、こうした保育園の毎日の生活描写が、果たして子どもたちの心を把え得るか否か、一瞬の疑問を抱かされる者も少なくないと思われる。もちろん、保育園での子どもの生活が、極めて楽しい筋立てをもつて展開されているのであるが、いわゆるメルヘン的な要素のない物語だからである。

しかし、この物語は、子どもたちの心を巧みに把握することができた。子どもたちは極めてスムーズにこの物語の中に入りこみ、物語の世界を生活するのである。これは、この物語の生活感情が、子どもたちの生活感情とピッタリ重なり合うという強味を持っているからに外ならない。

「お話」を選ぼうとする場合、それが「子どもにどう受けとられるか」「子どもの世界に浸透し得るものであるか否か」を判定する基準は、伝えようとする対象の生活感情のあり方なのである。

「お話」が、保育者によって作られる場合にも、同様なことが言い得るのではなからうか。

むすび

幼児のために、私共はどのような「お話」を、どのように選んだらよいのであろうか。それらの問題を考えてきたわけである。そして、まず、与えようとする対象と「お話」との関係の持ち方を把握することから考えを進めてみた。子どもと「お話」との関係が異なれば、「お話」の果たすべき機能も、使用される目的も、自ずから異なってくると考えるからである。

そして、幼児期の最初の段階で与えられる「お話」は、幼

児たちの経験を整理し、周囲の現象をことばに置き換えて認識させるための機能を果たすものとしたのである。

「お話」を「文化財」と考え、「物語」としての内容」を問題にするのは、幼児期の後半を対象とする場合である。そして、物語の選択は広範囲から行ない、幼児の生活感情を基準とした与え方を考えたわけである。幼児の生活感情と根本的にあい入れず、幼児の世界に通用することばでそれが語られるのでなければ、その内容や筋立てがどんなに巧みであろうとも、「幼児のためのお話」には成り得ないのである。

そして、いずれの場合にも、語られる「ことば」のひびきの問題とされた。「お話」は、純粹に「ことばだけで組み立てられ」「ことばだけに頼る」材料なのである。「ことば」としての美しき、正しさを欠くもの、「ことば」として幼児に受容しにくいものは、そもそもその条件を欠くといえるであろう。

「お話」のもつ「ことばのひびき、ことばの味」と、「ことばの適格さ、明瞭さ」に、私共は、より以上の注意を払わねばならないと思うのである。

(尚絅女学院短期大学)

＝ 継続するあそびの計画と実践 ＝

製作から、ごっこ遊びまで



山 本 益 世

「継続するあそびの計画と実践」というタイトルであります。経験の浅い私には、はっきりした結論を出すには、あまりにも未熟な故、過去の一保育の計画とその実践経過を振り返ってみたいと思います。

一、子どもの姿

三年保育三才児（十二月生く三月生）十五名（男児六名、女児九名）のクラス編成である。一、二学期は、ただ紙をちぎったり、箱を並べたり、或いは、大きな箱の中に入って遊んだり、その程度からあまり発展しなかったが、三学期に入り、心身の発達と共に、その生活も充実し特に「つくる事」に興味を持ち始めた。箱、紙、布、針金など引っぱり出してきては、のりでくっつけたり、セロテープで貼ったり、紐を巻きつけたり盛んにやり出した。またそれまでは殆んど無意図的であったのが、この頃から少しずつ意図的に物

をつくるという方向に、向かいつつあった。（しかしまだまだ偶然にできあがることの方が多い。）例えば、家からキャラメルを持ってきたと思うと、「先生、僕自動車作るんやで、牛乳のふたいっぱいちょうだい。」とやら牛乳のふたは、車輪にするらしい。「ごま（車輪）いっぱいつけたら、よう走るんや。」とただ箱に牛乳のふたを、のりでくっつけただけであるが、誰からも教えられず、自分で考え、一つの自動車を創造（大きさであるが、）したのである。二人の例外はあるが、クラス全体が、何かをつくらう、つくってみたいという雰囲気にあった。

二、テーマ設定の理由

前記のように子どもの状態が、しだいに意欲的になってきているので、この期の保育として、製作に重点をおき、楽しい遊びの中から創造性を養い、自主の精神を身につけさせたいと考えた。

三、目標

○いろいろな素材のあることを知る。(どんな物でも遊べるということを知り、製作を通して知る。)

○自分で材料を選ぶ。

○まずくとも、三才児なりに工夫して作る。(他人の良い考えからヒントを得ることもある。)

○技術は、粗雑であってもそれでよい。教師は良いできばえを望んで子どもの製作に手を加えるということは、絶対にしてない。

○可能ならば、製作物で遊んでみる。

以上目標を羅列したが、ともかく子どもたちが楽しく遊べればそれでよいと考えた。このことは即ち右記の目標を達成することになるのである。

四、予定

a、導入。材料を集める。集った材料を見たり触れたりしている中にその性質を知るようにしむけ、またそれらで遊んでいる中に製作意欲を起こさせるようにする。

b、展開。「何をつくりましょう」というのではなく「何ができるかな?」ということを始め、ともかく好きな物を勝手につくらせる。

c、整理。つくった物を見せ合う。また今度はどんな物をつくり

たいか、どんな材料を集めたらよいか話し合う。

五、実践の経過

a、材料集め

子どもたちに、今まで製作の時に遊んだことのある素材を思い起こさせ、そのほかにどんな物で遊んでみたいかを考えさせた。

今まで製作の時に使ったことのある素材(小さい箱・包装紙・色

紙・かまぼこ板・箸・ボール紙・牛乳のふた・セロファン)

「先生、僕ら大きな箱ほしいな。」

「牛乳のふたもまだだいるよ。」

「あのね先生、あたしのママ毛糸いっぱい持つてるよ。幼稚園に持ってこようか。」

「あら、いいわね。持ってきてちょうだい。」

「あたしも。」「あたしももってくる。」

このようなわけで、家庭とも連絡をとり、従来の素材の他に、空かん・空瓶・毛糸・布・木綿・綿・袋・ダンボールの箱・針金・紐・ビニール・ハトロン紙などできるだけ多く集めた。

b、導入

まず最初に、どんな物があるか、素材の入っている大きな箱を子どもたちの前にひっくり返してみた。「うわー。いっぱいやなあ。」

「あっこれ僕持ってきた箱や。」「あっこれあたしのや。」「僕の瓶やぞー」と最初は自分の持ってきた物をしきりにさがしては、それ

を離さなかった。(やはり子どもでも、自分の物に愛着を感じるらしい。) また友だちに、得意そうに見せびらかしていた。そのうちに、「あれっこれきれいな箱やな。」「それ僕の持ってきた箱や。」「ちょっと僕に貸してよ。」「うん。こんな具合に、持ってきた物の交換をはじめ、しまいには、自分の物も他人の物も区別なく、引っぱり出し、並べたり、積み上げたり、あるいは押しつぶしたり、引っぱりたりして素材に親しみその特質を知った。

第一日は、このようにして、素材に親しむことに終始した。

教師は、子どもたちの帰った後、素材を選びやすいように、分類しておいた。

c、展開

翌日、子どもたちは、素材を分類して置いてあるのに気付く。そこで、「みんなが持ってきたもの、たくさんあるけど、これを使って何かつくってみない？」と問いかけた。「つくるよ!」「つくりたい!」昨日より素材に興味をもっている子どもたちは、面白いながら、もう中腰になっている。自分の道具箱を取りに行こうとする子もいる。

のりの使い方(紙の上でのりをつける事)はさみの使い方は、すでに何回かの製作により経験しているが、もう一度子どもたちに確認させる。他に、新しい経験としてセロテープの使い方を説明する。また材料がいらなくなったら元に戻すこともつけ加える。(その間、子どもたちは、早くつくりにたくて、うずうずしている様子に、すぐ

活動に入る。)

大きな箱を見つけた子。小さな箱を両手に、一杯かかえ込んでいる子。好きな物が見つからないのか、あれこれ、ひっきり廻している子。毛糸玉をいくつかがしている子もいる。お茶目のY男は、大きな袋を頭に冠り、ふざけている。製作にあまり興味を示さないH子は、やはり座ったまま皆のすることを、にこにこしながら見ている。「H子ちゃん、何でも好きな物をさがしてごらん。」「うん。」と答えたまま、素材の箱に目をやっただけ。「H子ちゃんも何かつくりにくくなったら、つくったらいいわ。」とそのままにしておく。

「先生、電車電車。」「あら、いいわね。」大きな箱に小さな箱をいっばいくっつけてある。二階電車ということだ。車輪はついていない。それでも、チンチン、ガツタンガツタンと楽しそうである。M子は、タバコの箱を、いくつもくっつけて、その中が穴のようになっていく。スズメの家だそうだ。教師のよけいな間に答えようともしないで、「ギギギ紙ないかなあ。」と何にするのか、素材の箱の中に首をつっ込んでさがしていた。E子は、毛糸玉と箱を大事そうに机の上に置いてあったが、箱を斜めにしたとたんに、毛糸玉がすべり落ちた。「あっスベリ台すべり台」何度も毛糸玉をころがして遊んでいたが、細長い箱をくっつけて、スベリ台ができた得意になっていた。

三日目。

昨日自分たちで片付けた素材の箱を引っぱり出し、早速遊び始め

た。日子も、昨日からの友だちの様子に刺激されてか、包装紙を小さく切り始めた。昨日電車を作ったS男は、今日も電車らしい。ボタンを一杯飾って、それに、牛乳のふたを車輪にしていた。製作にはいつも意欲をみせるM男は、針金（風船につける針金）を何本もセロテープでくっつけて、放射状に交叉している。「先生、くもできた。僕どこにこんな大きなくもいたよ。」なるほどうまく作ったものだ。セロテープが一杯重り合って、ちょうどくもの休のように見える。「くもやぞー。」と皆をこわがらせていた。子どもたちは、全く自由素材を選び、時には、作った物をこわし、また「くも」が「ヘリコプター」に変わったり、種々さまざまに遊んでいた。豊富な経験を持ち合せていない教師は、愚問をしたり、意欲をそぐような助言をするよりはと、「まあ、いいわね。」とか「いい物を見つけたわね。」としきりに励ますかたわら、子どもたちが素材を選びやすいように、置き場所を工夫したり、狭い室のことで、活動しやすいうよう机を寄せたり、子どもたちの作っているのを笑顔でのそいたり。

四日目。

T男は、昨日作ったこわれかかった汽車を走らせながら、「キシヤキシヤポッポポッポ」と楽しそう。教師も箱を一つ取り出し、「キシヤキシヤポッポポッポ」と一しよに歌ってやる。製作していた他の子どもたちも歌い出した。「先生、大きな箱持ってきて。」とM男。どうするの？」「大きな大きな箱。僕ら入れるのやぞー。」と持ってきてあげるわ。でもどうするの？」「先生知らんの、汽車作るんや。」

と一本やられました。

「僕も。」「あたしも。」と今までの製作を放り出して汽車を作るといふ。ダンボールの箱を五個持ってくると、たちまちその中に入って「汽車汽車」と大騒ぎである。ひとしきりこのダンボールの箱ならぬ汽車で遊んだ。運転手まででてきた。そこで教師は、共同製作まで発展させようと考え、誘導してみた。汽車に乗った経験を話させ、次に子どもたち自身に汽車にならせて、汽車ごっこをさせた。運転手や車掌になる子もでた。おまわりさんになって交通整理をする子まででて、一口中汽車ごっこに熱中。明日はすばらしい汽車を作ろうと約束した。

五日目。

製作を始める前に、どんな汽車を作りたいかを考えさせた。子どもたちの意見は、殆んど今話題の『夢の超特急』だ。ピンク色できれいだとか、電気がいっぱいいついているとか、すごく長いとか種々の意見がで、三人ずつに分かれて、作り始めた。早速布切や包装紙をヘタヘタ貼り始めた。ある子どもは、調和を考えて、小さく切ったり、大きく切ったりして貼っていたが、たいいていの子どもは、大きいままで平気である。「先生、ボタン、ひつつかないよ。」とS男。ボタンを箱につけようとするが、つかずに困った様子。「セロテープ使ったら、どうかな。」「あつ、そうや。」と箱の内側にも外側にも、たくさん貼り始めた。「トンネルの中暗いやる。それで電気一杯つけるんや。」ということだ。M子たち女の子の汽車は、牛乳のセロファ

ンを一杯くっつけて「お花の汽車みたいやろ。」とやはり女の子らしい。H子も、きれいな包装紙を小さく切っては、根気よく貼っていた。また牛乳のふたをいくつか重ねて、大きなセロファンで包み、それを車輪にしている子もいた。M男、T男、Y男らは、一つの汽車に、思い思いに布やボタン、箱を貼りつけ、それこそ新型の汽車が完成？　したが、たちまち「衝突！　脱線した！」とこわして、今度は自分たちが汽車になって、庭へ出ていってしまった。それにつられて、他の子どもたちも「汽車ごっこしよう。」とあわてて作りかけを片付けて出ていく。友だちのちょっとしたことをすぐまねようとするのは、この年令の特徴かも知れない。

六日目。

昨日の作りかけの汽車に入ってガッタンガッタンとやり始めた。聞いてみると、もうこれできれいになったのだという。少々作ることに飽きてきたふうである。それよりも早く自分たちの作った汽車に乗ってみたいのだろう。(M男たちは、昨日のこわれたのを直すのに必死である。)できあがった汽車を五個並べ、一番前には運転手になる子が乗り、後にはお客が乗った。ガッタンガッタンと走り出した。教師は音楽係をかってでる。「キシヤキシヤポッシュポッシュ……」子どもたちは箱を両手で揺すって、結構汽車に乗った気分である。箱の底を破るとすっぽりと体が入ってほんとに走れるのと思ったが、子どもたちが気がつくまではとあえて手伝わなかった。(どうとう気がつかなかったが)今度は、めいめい汽車を

引っぱり始めた。後を押す子。中に入る子。また汽車同志を衝突させて喜ぶ……など。ペしゃんこになるまで遊んだ。

d、製作あそびを振り返って

まず第一に、一、二学期に比べて、子どもたちがすっかり成長しているのに驚く。技術ではなく、その態度、意欲においてである。「先生、できない。」とか「これ切って。結んで。」などと言っていたのが、まずいなりにも、自分でしようとする態度に変わってきた。また無気力な子どもも何日か続いた製作あそびのうちに、やろうと思えばやれるのだという糸口がつかめたようである。例えば、H子の例である。

またこの遊びを通して、物を大切にすることが十分身についたように思う。小さな紙片やこわれかけた箱までも、「これまだ使えるね。」と持ってくる。「この頃どんな小さな紙屑でもとっておいてくれ、というのですよ。」とお母様方の間からも聞かれた。

はじめは、ただ漠然と素材を集め、遊んでいるうちに製作に入っていたのであるが、そして作品は、殆んどこわしたが、粗雑な物であるが、子どもたちは、作る楽しみと作った物で遊ぶ楽しみを味わえたのではないかと思う。それに加えて、もっと教師が、適切な助言を与え、環境構成、導入方法を工夫すれば、子どもたちの製作意欲をより十分に満足させていたのではないかと反省すると共に、次の研究課題を発見させてくれた保育であった。

(和歌山信愛女子短期大学付属幼稚園)

幼稚園教育課程の実践的研究

— 幼児の成長体系を求めて —

大津市立長等幼稚園

当幼稚園教育課程（長等幼稚園プラン）の構成の立場

— 成長の体系（成長課題）をもとめて —

私たちは、三年間の「あそびの指導」についての実践と研究から、いろいろな経験をし、いろいろなことを学ぶことができたのであるが、その帰するところは、私たち教師一人ひとりのきびしい人間観（幼児観）への反省とその確立であり、幼児教育観の再発見ともいえると思う。

そして具体的にはそれにもとづく、教育計画の確立への足場をどこに求めたらよいのかということであった。つまり、私たちが教育実践の中でその指導の計画や指導について反省評価するとき、はたして幼児自らが意欲的に遊び方（「学び方」ともいえる）を工夫し発展させていくような人格が成長するような教育計画であったかど

うか、謙虚に真剣に反省してみなければならぬということである。

すなわち、幼児たちの一つ一つの活動や経験がはたして、幼児自身の自発的、創造的、協調的な人格の成長から見、それぞれ意味や価値があったらどうかというきびしい自己反省である。

まず一年保育期間の過程において、幼児の物や人に対する見方、感じ方、考え方がどのように成長していくかを考え、幼児たちの成長の課題を軸として指導目標とその活動内容をおさえようとした。

このことをいいますし具体的に考えてみると、幼児が活動しようとするということ、教師のもつねらいがうまく調和すれば幼児自身も興味をもってあそびが発展し、幼児たちの活動が中広くなり健全な成長がみられると思う。それに対して、あまりにも不調和であれば幼児自身がめざす自己実現の可能性をも十分に発揮できないだろうとお

成長体系(成長課題)表
(4月～7月)

期間	おもな見方, 感じ方, 考え方	成長課題
一 入園 当 初 二 週 間	<ul style="list-style-type: none"> ○幼稚園のある物は何でも使っていいのだろうか。 ○自分の位置をはっきりさせたい。 ○物の使い方を知りたい。 ○あそんでほしい。 	○よりどころを求めている。
三 週 間 ～ 五 月 上 旬	<ul style="list-style-type: none"> ○何でもふれてみたい。 ○眼にふれたものを使ってあそぶ。 ○美しいものや目新しいものにどびつく。 ○遊具や材料などをひとりじめにしたい。 ○近所や座席に近い友だちとあそぶ。 ○自分であそび場所を選ぶ。 ○何かあそびを見つけたい。 	○自分を守りながら, 何かしてあそぼうとする。
五 月 中 旬	<ul style="list-style-type: none"> ○身近にある遊具や材料を何かにみたくてあそぶ。 ○自分のやりたいことを思い思いにしながらごっこあそびをする。 ○遊具を早く使いたい。 ○虫などを捕ったり集めたり歩かせたりしてあそぶ。 ○ほしい材料を自分で探したり教師に求めたりする。 	○自分のほしいものを求めながら, 自分のやりたいことを思う通りにしようとする。
五 月 下 旬 ～ 六 月 上 旬	<ul style="list-style-type: none"> ○高いところへ登ったり, とんだり, 大きなものをころがしたりする。 ○暗い所や低い所へはいったり, くぐったりする。 	○まわりのものになれ, 自分にもできるかためしてみようとする。
六 月 中 ～ 下 旬	<ul style="list-style-type: none"> ○自分のやりたい仕事のできる役を求める。 ○あそぶ場所の広さや遊具の数などを理由にして, 仲間に入れようとしなないことがある。 ○水をなぶる。 ○水を容器に入れたり色水を作ったりしてあそぶ。 ○泥土を掘ったり, 泥水を流したりして川や道などを作ったりあそぶ。 ○水たまりに入ってあそぶ。 ○気心や能力の合った友だちとあそぶ。 	○自分と気心や能力などの合った友だちを見つけてあそぼうとする。
	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の言いたいことやしたいことを一方的に言いながらあそぶ。 ○音楽にあわせて, 歌ったりおどったりする。 ○いろいろな絵本がみたい。 	○自分が表現したいことを進んでしようとする。
七 月	<ul style="list-style-type: none"> ○多くの友だちといっしょにあそぶことをのぞむ。 ○遊具を早く使いたいが友だちと同じように使った方がよいと思う。 ○間違っていると思うことをしないよう他人に言う。 ○自分たちであそび方をきめる。 ○リーダーの役づけにしたがって, ごっこあそびをする。 	○数人であそぶことに興味をもち始める。
	<ul style="list-style-type: none"> ○草花を摘んできて飾る。 ○いろいろなき方を工夫して絵をかく。 ○いろいろな遊具や材料で工夫して大きなものを作り, それを使ってごっこあそびをする。 ○水の中へ入ってあそぶ。 ○いろいろな材料で工夫しながら, 何かを創る。 ○ボールをなげたりとばしたりする。 ○紙ひこうきなどがどうしたらよくとぶかのためしてみる。 	○目的をきめて工夫しながらあそぶ。

もわれる。こうした不調和をできるだけ最小限度にしていく努力が幼児教育にたずさわるものの一つの責務でもあり、今日の課題でもあるとおもう。こうした仮説にたって実践し研究してきた幼児の成長課題についての試案はけっして充分なものではなく、まだまだ吟味しなければならぬとおもっている。私たちは本年度四月入園当初より七月までの一学期間、私たちがありのままにとらえた具体的なあそびの事例を通して幼児の物や人に対する見方、感じ方、考え方などから、幼児の内面的なものをできるだけ理解しようところをみた。

私たちはこうして幼児の内面的な世界の理解につとめているうちにその成長が次第に明確になり、更にくつかの成長段階にまどめすることを発見したのである。これらの研究はまだまだその中間であり、こうしてあみだした成長課題をふまえて指導の目標を立てると共に幼児活動のよりよい発展を考慮しつつこれを援助することに努力しつつあるのが現状である。こんごもこうした成長課題に検討を加えると共に、更に幼児たちのよき自己実現を可能ならしめる教育の充実を期したいと念願しているのでこの立場と考え方や実践などについての御批判と御指導を切におねがしいしいものである。

幼児の成長を追って

—成長の体系がみられた事例と「幼児の見方・感じ方・

考え方」—

〔入園当初の二週間〕

・幼児のすがた

〔事例一〕ままごと道具

ままごと道具の箱を二箇所に出す。その側にごぎも二、三枚出しておく。女児二、三人と男児一人そのあたりをいったりきたりしている。T「これを使ったかったら、使ってもよいのよ。」お互に顔を見合せてにやっとならったり、赤面してうつむく。教師ごぎを一枚のばし、ままごと道具箱のふたを開いてみる。(一八)と(一九)そばまよってきて、中をのぞく。(二〇)ごぎの上に座り道具を全部出し、一つひとつ並べはじめる。(二一)(二二)の二人も近寄ってきて、ままごと道具をなぶり出した。

〔事例二〕色板

色板を男児三人がなぶっている。そこへ男児(八七)来る。(八七)「ワーア、先生に言うたろ。そんなんなぶったらあかんど。」(三)「オイ、幼稚園にあるものは、何でも使ってもよいのやで。」(五)「そうやねえ。先生ちっともおこらはらへんど。」教師のいるのに気づいたみんなは、一斉に教師の顔を見る。T「よく知ってるね。幼稚園のものは、何でも使ってよいのよ。仲よくあそぼうね。」男児みんな「ハイイ。」元気な返事をする。

・見方・感じ方・考え方

(1)これは何だろう。

(2)黙って使ってはいけない。

(3)貸してほしいけどなあ。

(4)貸してもらっていいのだろうか。

(5)幼稚園の物はみんなつかってよいのだろうか。

・まとめ

幼稚園にあるものは何でも使っているのだろうか。

〔事例三〕 不安なB子(三)

入園して三日目の朝(六)は母親と登園した。母親にかばんを持ってもらって、園庭の築山をのぼったり、降りたり、一人あそびをしている。T「かばんを自分の場所へかけてきましようか。」と言うとそばの母親が「『下駄箱やかばんをかける場所がわからないのでもし違ったらかなわんし、腰かけもよその人が腰かけてたら困るから庭にいるのがよい。』と申しますので……。」と心配そうに言われた。

・見方・感じ方・考え方

(1)自分の場所がはっきりわからない。

(2)自分の場所をもし間違ったらどうしよう。

(3)自分の場所を友だちが使ったら困る。

(4)みんなと同じようにできなかつたらどうしよう。

(5)いじめられないだろうか。

・まとめ

自分の位置を安定させたい。

〔事例四〕 便所の場所

(三〇)(三六)(四六)の女児三人が話し合いながら園庭から走って来る。

(三〇)「先生あそこいややるわ。」三人が教師のそばまで走って来ると、(三〇)「先生、おしっこしたいけど、どこですの。」T「こ

っちよ。」便所につれていく。用便をすませた(三三)(四六)はにこしながら、待っていた(三六)のところへ来て、(三三)「アアよかった。

すーっとした。」(四六)「どこやわからへんし、どうしようおもたな

あ。」三人はまた園庭に出て行ったが途中で出会った(四六)に、(二六)

「お便所へ行きたいのとちがうか。お便所やったら、うち教えたげ

るわ。」と言って場所を教えている。

〔事例五〕 後かたづけ

十時過ぎ「かたづけましょう。」のレコードが聞えてきた。会集

室で、ままごとをしていた(二四)「先生、あれがなつたらかたづけ

るのやな。」T「ええ、よく聞えたわね。さあ一緒にかたづけまし

よう。」(五五)「みんなかたづけるのやで。」ままごとをしていた女児

(四三)(五〇)(四七)(二三)は、それぞれに、おもちゃ箱におさめて

いる。(二四)「先生これ(ままごと道具)どこへおくの?」(五五)

「先生のごきどこへかたづけるの?」T「おもちゃはこの隅へお

きましよう。これからは、いつもここへかたづけましようね。ごき

はあっちのお部屋やし、先生と一緒にいこうね。」ごきそうに

使った草花が散らばっている。教師等とちりとりを持ってきて置く

ておく。(二四)が馴れない手つきで掃き集め、ちりとりでごみをと

った。T「御苦勞さんでした。帚とちりとりは、ここへ戻すのよ。」と一緒にかたづけに行き、それぞれの場所を教える。

・見方・感じ方・考え方

(1)幼稚園の便所などはどこだろう。

(2)あそんだ後の遊具は、どうするのだろうか。

・まとめ

物の使い方・扱い方を知りたい。

〔事例六〕あそんでほしいS子(一六三)

登園してきた(一六三)は部屋の入口に立っている。T「(一六三)ちゃんきのうのお友だちの(一六六)ちゃんは？」(一六三)だまって首を振っている。T「どこへいかはったやろうは。先生と一緒にさがそうか。」

(一六三)を連れて(一六六)をさがしに行く。花つみをしている(一六六)の姿を見つけたので、T「(一六三)ちゃんのところへつれて行ってあげようか。」と聞くがすぐ「うん」とうなずいた。(一六六)のところへ行つて。「(一六三)ちゃんきやはったしあそんであげて。」と言つと(一六六)「おいでお花つんでるの。ほれこれだけとつた。」と見せてくれた。

(一六三)もすぐうれしそうな顔をして草花を摘み出して、とつた花をさかんに(一六六)に渡している。

〔事例七〕いたずらをするA児(四三三)

(四三三)(四三三)(四三三)の女児五人が園庭のごぎの上でままごとしてしている。側にもう一枚ごぎが敷いてある。その上に(四三三)の男児

がすわって、地面の砂を集めては、ままご道具にかけている。二度目に砂をかけた時(三三)「先生、この人砂かけはるわ。怒りー。」

(四三三)「まげて言うてるのにまげてくれはらへんにや。」(五四三)「先生お茶碗が五つやろ、お皿も五つしかないしあかんにや。」(四三三)「ないでもかまへんし、まげてくれ。」(三六)「ほな、入りいさ。」(五四三)

「まじりいさ。」(三三)は庖丁でなっぱを切りながら「(四三三)ちゃん、あんたお父さんになりいさ。」(四三三)「うんお父さんけ。」(四三三)「お父さんは、お店の用事で自動車を運転していかはんのやぞ」と早速

出かけていった。

○見方・感じ方・考え方

(1)あそんでほしい。

(2)友だちがほしい。

(3)同じことをしてあそびたい。

○まとめ

あそんでほしい。

〔事例八〕記録写真

参観人の王先生。こどもたちの作品を机の上に並べて、カメラにおさめようと準備される。カメラを向けて、今にも撮ろうと構えられた時、入口から入って来た(九五)、ただ何となく作品にふれると立てかけてあるけずりあそびの三角板を持ち上げる。T「ちよっとなぶらないでね。」教師、並べなおすと王先生もカメラを構えなおさ

れる。そこへまた、(二七)(二八)二人の男児が入って来て、カウボーイの罐人形を持ち上げると何か話をしながら横へ置く。次々と入って来ることもたちの殆んどが、並べてある作品にふれるのを見て、王先生「だめね。もういいわ。」写真をあきらめて立ち去られる。

〔事例九〕素材

保育室の片隅におかれている素材(瓶のふた、空瓶、空箱、布切れ、包装紙など)を三人の男児がさわりながら話している。(一六)「これ牛乳のびんのふたやなあ。うち(家)にいっぱいいためたるわ。めくりするのや。」(一五)「ぼくも牛乳、毎日とってるし、だいふためたわ。」(一五)「これマーブルチョコの箱や、煙突みたいやね。」(一五)「これ穴あけたら、望遠鏡になるわ。」(一六)「そうや、このキヤラメル(箱)やら積んで、自動車できるわ。」と次々にいろいろなものにふれながら話し合っている。

○見方・感じ方・考え方

- (1)何となくふれてみたい。
- (2)これは何だろう。
- (3)おもしろそうなものだなあ。
- (4)これ知ってるわ。
- (5)さわってもいいかしら。

○まとめ

何でもふれてみたい。

〔三週〕五月上旬

○幼児のすがた

〔事例一〇〕ままごと(貸してほしい)

会集室の一隅にベッド、人形芝居用の枠などをおいておく。(一四六)が、「ちょっと、これ窓にせえへんか、かいてえさー。」(一五〇)「これもよいわ。赤ちゃんねやはるのに持っていこか。」と言いながら、(一五二)と枠を持って行くと、積木で形どった家の間に置く。カーテンをあけしめして、(一五三)「こまどえ。今あさやし、あけとくわ。」とだれに言うともなくいっている。

○見方・感じ方・考え方

- (1)これよいなあ。
- (2)かしてもらおう。

○まとめ

眼にふれたものをつかってあそぶ。

〔事例一一〕美しい紙

赤組の室に、包装紙、大きい色紙、金や銀の紙その他いろいろの紙を出す。(一六七)、金銀の紙を五、六枚もつ。(一六五)「先生(一六七)ちゃんあんなぎょうさんとらはったわ。あかなあ。」T「(一六七)ちゃんは、それでなにかしてあそぼうと思ってるのどちがうか。」(一六七)うなづく。T「さあ、どうしてあそぼうかなあ。」(一六七)その中の一枚で飛行機を折り出す。(一七〇)「先生、これはさみで切ってもよい

か。」T「いいわよ。はさみで切つても、ちぎつても。」(七〇)はさみで切り出す。T「ワァー、きれいに切れたね。せつかくできたのやし、のこしておいて、みんなにみせてあげようか。」(七〇)はニッコリしてうなづく。T「この紙にのりではっておこうね。」と言つ。

〔事例一二〕リング雲梯

月曜日の朝、登園して来た幼児の姿をみているといつもと、どこか違うようである。始めて見たリング雲梯の為だろうか。(三三)「あれ、なんやろ。」かばんを持ったままで園庭の一隅におかれてあるリング雲梯の方を見ている幼児、かばんをおくのもそこそこに走って行く幼児。見ている間に、リング雲梯は、一ぱい幼児たちでかこまれている。両端や真ん中から思い思いに乗ってくるので、衝突して少しも進まないし、行列は長くなるばかり。(四七)「はよいけよ。何してんにや。」とわいわいさわいである。T「真ん中から上らないで下りるところにしたら。」と言つとどうやら行列は動き出した。

○見方・感じ方・考え方

- (1)きれいやなあ。
- (2)これほしいなあ。
- (3)どうしてあそぶのやろう。
- (4)私にもできるだろうか。
- (5)何だろう。
- (6)これであそんでみたい。

○まとめ

美しいものや、目新しいものにとびつく。

〔事例一三〕鈴

(二五)(三〇)男児二人保育室の机の上に置かれてある楽器をしばらく見ていたがそのうちにさわりはじめた。ハンドカスタをカチツとならしてみたり、鈴をちょつと振つてみたりしている。(二五)「先生、これつこてもええのか。」T「いいよ。誰でも使えるのよ。」(二五)「ぼくこれにしよう。」タンバリンを両手に持つ。(二六)「ぼくはこれや。」鈴を両手に持った。鈴を振っていた(二六)は何を思ったか鈴ばかり六、七個も手に通して振り鳴らしながら走り廻る。それを見た(四四)「おい、ぼくにもかしてくれよ。」(二六)「かなん、あっちの貸りてこいよ。」自分の持っているたくさんの鈴は貸そうともしないで振りながら走り廻っている。

〔事例一四〕ぼくのブランコ

(三四)は隣のブランコをかかえながら、ブランコあそびをしている。(三六)(三六)の女児二人が走って来て「ブランコかして。」「うちものせて。」と言つても(三四)はしらん顔して乗っている。(三六)「先生。この人かしてくれはらへんね。」(三四)ちゃん、この人たちがかしてほしいと言つてはるのやけど。(三四)「これ(八)ちゃんかしてや、と言わはったのやしあかんのや」T「(八)ちゃん今ここにいないでしょ。」しばらく沈黙。(三四)「ふん」不服そうに(三六)に貸してやる。(三六)「(三四)ちゃん二〇ずつでかわろな。」と言つて振

りはじめたところへ(六)走って来る。(二)「おい、これはぼくのやぞ、乗ったらあかん。」と取り返そうとする。T「(八)ちゃんは今乗ってなかったし貸してもらったのよ。」(八)「そやかて、ぼくがとつとしたのに。」T「ぼくも今乗りたいの。」(八)返事がない。

T「乗るんだったら、かわり合つてあそんだらどうかしら？」(八)は今までまじっていた走りごっこ仲間のところへ走って行つてしまった。

○見方・感じ方・考え方

- (1)ぎょうさん(たくさん)ほしい。
 - (2)自分のものにした。
 - (3)一人で使いたい。
 - (4)友だちに貸すのはかなん(いやだ)。
- まとめ

遊具や材料などをひとりじめにしたい。

〔事例一五〕近所の友だち

廊下で、五人の男児が丸になって何か話し合っている。その中の一人(二五)「(四三)ちゃんと(四三)ちゃんは、ぼくがこの家の近くやし、ようあそびに来るなあ。」(四三)「そうや今日も行くのや。」(二五)「(四三)ちゃんと(四三)ちゃんはぼくとこ親類やさかいやねえ。」(四三)「(四三)ちゃんと(四三)ちゃん(二五)「おまえらを泣かしょつたら、ぼくがやっつけてやるにやねえ。」そばで聞いていた(三)「ぼく何にも悪

いことしてへんで。」と心配そうに言う。(二五)「おまえらはせえへん。悪いことしたもんだけや。」こんな会話がしばらく続く。(二五)「おい、みんな積木してこうか。」みんな「ぼくもませてや。」ませてや。」と口々に言いながら会集室の方へ行く。

〔事例一六〕友だちがない

日頃元気にあそんでいる(八四)が、今日は一人柱にもたれかかっている元気がない。T「(八四)ちゃん、どうしたの。」と聞いてみると、(八四)「私のお友だちが今日は休まはったしあそぶ人がないの。」近所の友だちの(六六)は今日欠席である。T「そうそう、(二六)ちゃん今日は休まはったし、困ったね。でも今日は違う友だちとあそぼうね。」(八四)うなづく。T「あそこに(七)ちゃんがいはるけど。」(八四)「そやけど(二五)ちゃんがいっしょにあそんではるし、かなん。」T「どうして。」(八四)「男の人はいじめはるし、かなんのだ。」T「そう、男の人はかなんの。では誰がいいの。」(八四)「あんな、(二六)ちゃんやったら、いつでもいっしょの机やし、しってるけど……。」(八四)は(六六)となら元気にあそべるが、他には友だちがないらしい。

○見方・感じ方・考え方

- (1)自分の知らない友だちとあそびたくない。
- (2)男の子はいじめるからかなん(いやだ)。
- (3)仲間入りしたいけれどいいのははずかしい。
- (4)どうして仲間入りしてよいかわからない。

(5) 保方やし(だから) いじめられても助けてもらえる。

○まとめ

近所や座席に近い友だちとあそぶ。

〔事例一七〕 ままごとあそびの場所

女児三人、ままごと道具を前にして、話し合っている。(五〇)「どこでする。」(五一)「電話のとこへ行こう。」(五二)「そやなあ、電話のとこがええな、電話が使えるし。」(五三)と(五四)はままごと道具をかつぐ。(五四)「そんなら、うちこぎ運ぶわ。」こぎを取りに行く。(五五)がまぜてほしそうちに(五六)に近寄る。(五七)「(五八)ちゃん、まぜて。」(五九)「(六〇)ちゃんにきてみ。」(六一)は(六二)のところへ聞きに行く。

○見方・感じ方・考え方

- (1) どこであそぼう。
- (2) ここがええわ(よいわ)。
- (3) これがあるし(あるから)、ここがよいわ。

○まとめ

自分であそび場所を選ぶ。

〔五月中旬〕

○幼児のすがた

〔事例一八〕 紙つなぎ

男児(四)は、自分の保育室が一番安定するらしく、しばらく腰掛けていたが、(四一)「何かおもしろいことないかなあ。」とひとり

言を言いながらうろうろと室内を歩き廻り、素材の置いてある棚から、円形の厚紙を見つけた。(四二)「先生、これ使ってもええか。」

T「はあ、使ってもいいよ。」(四三)「おくれや。」(四四)「(四五)ちゃん、それ何するもんえ。」(四六)「ぼくも知らんけど、おもしろそうなんやろ。」(四七)「ぼくにもくれや。」(四八)「(四九)ぼくにも一枚くれよ。」(五〇)「うん。」「うん。」一枚ずつわけてやる。クレパスを出してくると、(五一)のまねをしてその紙に絵をかいていた。(五二)

「おい、みんなかいた絵をつなごうか。」(五三)「そやな、つないでくれ。」長くつなぎ合された紙を見て、(五四)「東京タワーができた。」(五五)「ほんまや。」みんな楽しそうである。

○見方・感じ方・考え方

- (1) 何かおもしろいことないかなあ。
- (2) 何をしてあそぼう。
- (3) どれであそぼう。

○まとめ

何かあそびを見つけたい。

〔事例一九〕 ダンボールの汽車

大きなダンボールの箱の中に、二人の男児が入って走っている。

(四〇)「ぼー、ぼー。」(四一)「汽車や。」元気に走り廻っているうち

に、ダンボールの箱の汽車は、だんだんこわれて来た。(四〇)「こんな、あかんわ。もっとええの作ってこよう。」(四一)を残して行ってしまふ。(四二)一人で走る。ひきずっていた汽車の一片が破れ落ちる。(四三)がそのダンボールの一片を拾い上げると、端についてあるひもをひっぱって走り出した。(四四)「たこや、あんまりあがらへんな。」たこあげのつもりらしい。

【事例二〇】おみこし

廊下へ太こ、タンバリン、鈴などのリズム楽器を出しておく。

(二)がそこで太こをたたいている。「とーん、とーん、とん、とん、とん」とリズムカルである。側にいた(七五)「お祭りしようか。」と言う。(二)「うん、しよう。」(二)は太こをたたきながら歩き出した。(七五)(三五)(二七)がはしこを持ってきて(二)のうしろからついて歩く。暫くつづいたが、(三五)と(八)がダンボールの大箱を持ってきてはしこの上にのせた。(三五)「おみこしかつぎやー」と言う太この列からはなれ、テンポを早めて「わっしょい、わっしょい」と廊下を小走りしていく。T「おみこしさんが通りますね。これ(うちわ)をかしてあげましょうか」と渡す。早速(七五)がそれをもらうと、おみこしの先頭に立って、うちわをふって歩く。皆にこの得意そうな顔で、「わっしょい、わっしょい」と通り過ぎて行った。

○見方・感じ方・考え方

- (1)○○みたいなあ。(2)○○にしとこよう。

(今までに見たもの、経験したこと、やってみたいことなどが、物に接することによってあらわれてくる。)

○まとめ

身近かある遊具や材料を何かにみたててあそぶ。

【事例二一】ままごと(好きなようにしたい)

廊下の隅にごぎを敷き、女兒五人がままごとをはじめめる。(三四)

「私はお母さん。」(六)「私もお母さんしよう。」といいながら、おぜんやお茶碗を出している。(三六)は園庭から草をたくさん採って来て板の上で切りはじめめる。(五)「(二)ちゃん、この草使わしてや」(三)「ふん」(三)と(五)は、てんでに草を切っている。(三四)「切るもんないかなあ」と探しているが見当らないので教師のところに来る。(三四)「先生、おげごごの切るもんかして。」教師が包丁を渡すとまた続いてもう一人が来る。(六)「先生、うちも、庖丁ちょうだい」T「あなたとこのお家、庖丁たくさんあるでしょう。」(六)「そうかて、あの人も切らはるし、うちも切りたいのや。」とまた一つ持って行った。五人のうち四人までが好きな場所で草花を切っている。残りの(三)は一人でお茶碗をならべている。

○見方・感じ方・考え方

- (1)私の好きなようにしたい。(2)私は何々がしたい。
(3)家でさせてもらえないからやりたい。
(4)今までにしたことがあるからやりたい。

(5) おもしろそうだからやりたい。

○まとめ

自分のやりたいことを思い思いにしながら、二つこあそびをする。

〔事例二二〕ブランコの順番

一つのブランコのまわりを、数人の女児がとりまいてる。どうやら取り合いになってるらしい。(六六)「あの人ばかり使ってる。」(三四)「ぬかきはる。すこいすこい」真ん中に立っている(三六)「そんなら、順番きめようさ。」(三四)「じゃんけんしよう。」T「いいことに気がついたね。きつと上手に使えるやろうね。」数人のあいまいなじゃんけんも、(三六)のリードによって、一列にならぶことができた。

○見方・感じ方・考え方

(1) あの人、一人で使ってる。(2) 早く使いたい。

(3) 知っている友だちと、かわり合って使いたい。

(4) じゃんけんで順番を決めよう。

○まとめ

遊具を早く使いたい。

〔事例二三〕毛虫つかみ

園庭のもみじの木の下に、数人の男児が頭をくっつけて何かしている。T「何してるの。」(五二)「毛虫やほれ、こんなようけ。」T「ワ

アッ、大きな毛虫ね。」(五三)「この毛虫は大将や。このちびのは兵隊やで。」T「さう、毛虫にそんな区別があるの。」(五三)「あんな先生、一番ごっつい(大きい)のは一番大将言うのやで。そやけど、そいつはなかなか見つからへんわ。」T「さされないの。」(五九)「ぼくさされたことあるわ。」(五九)「中位の毛虫はさしよるけど、ごっついのはさしよらへんぞ。」(五九)「ここをつかんたら、さされへん。」T「どんな所にいるの。」(五九)「この木にぎょうさん(たくさん)いる。」ともみじの木を指す。(五九)「柳の木には一番ぎょうさんおるぞ。みんなつかんでこよう。」みんなは走って行った。

〔事例二四〕歩くかぶと虫

(六二)、(六三)の二人が、平均台のところがかぶと虫とあそんでる。(六二)「こんどはぼくの番やぞ。」(六三)「ワアッ、おちよるかと思っただけど、うまいこと歩きよるな。」かぶと虫は平均台の上をヨチヨチ歩いている。二人は坐り込んでしまつて、それをじつとみている。(六三)「ここまで歩きよるかなあ。」(六三)「さあ、そりやちよつと無理やろな。」T「そのかぶと虫どうしたの。」(六三)「(六三)ちゃんがつって来はったのや。」T「(六三)ちゃんどこへ行かはったの。」(六三)「今、かぶと虫の家を作ってるのや。」(六三)の作っている家を見に行く。

○見方・感じ方・考え方

(1) これ何と言う虫やろう。(2) どこにいるだろう。

(3) たくさん捕みたい。(4) ちょっとこわいけれど捕みたい。

- (5) ここまで歩くだろうか。 (6) いるぞ。 (7) 欲しい。
 (8) 逃げないだろうか。 (9) つかみたい。 (10) 歩かせてみたい。

○まとめ

虫などを採ったり、集めたり、歩かせたりしてあそぶ。

〔五月下旬～六月上旬〕

幼児のすがた

〔事例二五〕車つくりの材料

緑組に大小の空箱をたくさん出す。(一三三)「先生、これであそんでもよいのか。」(一五七)「先生、ほくませてや。」箱を積んだり、並べたりしていたが、自分ののりを持って来て箱をくつつけようとする。

(二三三)「先生、つかへんわ。トラックしようと思うのやけど。」教師セロテープを渡してやる。(二三三)「車にするのやけど、こんなのも一つないか。」T「(二三三)ちゃんこれでどう。」(二三三)「うん、これでよいわ。ありがどう。」(二五七)「先生、穴あけて。そして針金みたいなもんほしいにや。これとおすのに。」自分の欲しいものを言ったり、素材の中から何か探し出したりしながら、何か作るのに一生懸命である。

○見方・感じ方・考え方

(1) 何か作りたい。 (2) ○○がほしい。

(3) ○○をさがしてこよう。 (4) 先生に○○をもらってこよう。

○まとめ

ほしい材料を自分でさがしたり、教師に求めたりする。

〔事例二六〕滑り台の上

(七五)「スーバーマンやー、ビューン…。」会集室の滑台で数人の子どもがあそんでいる。男児の中に女児が一人入っている。滑らないで、一番上のさくから横へとびおりにいるのである。(二七)「ワァーッ、とべた。」(三三)「おい、もうちょっとマットをそっちの方へ離してくれ。」(四四)「ぬかすなよ。おしたらこわいやんけ。」滑り台の階段には大勢並んで自分の番を待っている。さくの上で、こわそうにもじもじしている子どももいる。

〔事例二七〕タイヤころがし

築山の滑り台のところへ登ったり、滑ったりしているうち、玄関脇に置いてある古いタイヤに気がつく。(二三)「おい、タイヤころがそか。」(二九六)「ほくもしよう。」二人はタイヤをころがしながら築山まで運び、やっとの思いで持ち上げる。(二三)「ここからころがそうか。」滑り台の上をころがそうとする。(二九七)「よし、お前先にやれ、次にほくもやるし。」(二三)「一、二、三。」タイヤは上手に遠くの方までころがって行った。(二九九)「よし。えい。」今度はちよっと右ころにはずんで、近くで倒れてしまった。(三三)「ほくの方がうまいこと行ったぞ。」(三〇七)「もう一回しよう。今度はじょうずにころがってくれよ。」タイヤに話しかけたりしながら、二回三回と繰り返してあそんでいる。

○見方・感じ方・考え方

- (1) 高いところからとびたい。
- (2) 高い所から、大きなものをころがしたい。
- (3) 登りたい。
- (4) こわいけれど、やってみたい。
- (5) わたしにもできる。
- (6) スーパーマン、七色仮面になりたい。

○まとめ

高い所へ登ったり、とんだり、大きなものをころがしたりする。

〔事例二八〕積木のトンネル

積木を両側に積み重ねて、その上に板をのせる。一か所小さい入口をあけて、もぐり込んだり、くぐりぬけたりしている。その片隅に、積木を高く積み上げた囲いをし、とりでのようなものを作る。

〔七〕〔六〕は低く板をのせた所へもぐり込んであそんでいる。〔七二〕「〔六〕ちゃん、はいれたけ。」〔六九〕「くぐれるわ。」〔七〕「よし、ぼくもはいろ。」二人はばらばらになって、ごそごそもぐり込む。〔六九〕「おい、もうちょっと長うしようか。」〔七三〕「そうしよう。」

トンネルを長くする。〔六五〕、〔四〕、〔五〕「ませてや。」仲間に入ってそこへもぐる。〔六五〕出て来る時「ウォー。」と側にいるものをおどす。側にいた〔六四〕、〔六〕、〔七〇〕三人の女兒「キャー、キャー。」と逃げまわる。〔四〕、〔五〕もまた同じように女兒を追っかけて喜ぶ。

○見方・感じ方・考え方

- (1) 見えないところへかくりたい。

- (2) 低いところをくぐりぬけてみたい。

- (3) 暗いところへ入ってみたい。
- (4) くぐれるか、ためしてみたい。
- (5) 人をおどかしたり、こわがらせてみたい。

○まとめ

暗いところや低いところへ入ったり、くぐったりする。

〔事例二九〕ままごと（好きな役がしたい）

廊下にごぎを敷き、女兒〔五〕、〔六〕、〔五〕、〔六〕がままごとをはじめ。〔五〕「わたしお母さんになるわ。〔六〕ちゃんは姉さんになりーき。」〔六〕「かなん。」〔五〕「なんでや。」〔六〕「姉さんやったら庖丁でごちそうつくれへんし。」〔五〕「〔六〕ちゃんもちょっと位庖丁で切らしたげるし。」〔六〕「ふん、ほんなら姉さんになるわ。庖丁で切ってごちそうつくりするで。」〔五〕「〔五〕ちゃん、〔六〕は子どもになりや。」〔五〕、〔六〕「ふん、ふん。」満足しているのだろうか。〔五〕、〔六〕二人は、まないたの上で、草花をきってごちそうつくり余念がない。

○見方・感じ方・考え方

- (1) 自分のやりたいことのできる役がさせてほしい。
- (2) 庖丁でごちそうつくりがしたい。

○まとめ

自分のやりたい仕事のできる役をもとめる。

つづく

教育図書を紹介

楽譜集・製作材料

山村きよ

◎最近の楽譜集について

昨年度中に見たものの中には、幼稚園だけで使用するために選曲されているものあまりなくて、「母と子のための音楽」といったようなものが目立って多くなつたように思います。また幼児雑誌の附録として入ってきたものの中にも取りあげられるものがありました。「ぎんのすず」などは新曲が一枚ずつ挿入されてありましたので、保育室用に備えたものの中からはずして「楽譜集」を造つておくに便利です。

次に記す図書は幼稚園内で利用できる歌曲を案外たくさん盛りこんで使いやすくしてあるように思います。

○「みんなでのしく」日本幼児教育研究会編 フレーベル館発行 (二五〇円)

これは一昨年四月から発売された「保育レコードシリーズ」の手から、きくこと・歌

うこと・ひくこと・うごきの四つの分類のもとに、レコードを選び、一か年間の教材二五曲を編集したもので解説書と楽譜集が二冊に分けられていることが便利です。とくに鑑賞教材は曲想がつかめる程度に、誰にでもひきこなせるように変曲してのせてあることも利用されやすい点だと思います。

○第二集「歌つて、おどつて、げんきよく」前と同じ種類のもので内容をかえたものが五月中旬にはフレーベル館から発売される予定です。

○こどもミュージカル・7つのオペレッタ
藤田妙子著 フレーベル館発行(三四〇円)

○同 5つのオペレッタ
どちらも手にした時はちょっとむずかしい専門的なものを感じましたが、内容のいくつかが「たろうのパケツ」「おサルとはながさや」などゆかり幼稚園の実際のうごきを見て、こどもたちがよく音楽のふんいきにとけこみ、リズムにのつてたのしそうに演じているのを見て、案外利用されるのではないかと思いました。

○こどものための音楽リズム十二ヶ月
本多鉄磨、山田光、山村きよ共著、
(六〇〇円) ひかりのくに社発行

これは四年前に出版されたものですが、これをつくった時に教材としたものは、三つの幼稚園でこどもたちがよろこんで歌っ

ているもの、おどっているものの中から選んでのせましたので案外利用度が多かったようです。とくに歌の指導から展開してうごきになるまでのつなぎの音楽も、そのために新しく作曲されたものだっただけに魅力だったのではないのでしょうか？ これも解説書と楽譜集とが二冊に分かれていることは使いやすいようです。

◎製作材料を扱った図書について

製作方面のことをかかれた図書は案外少ないようです。折紙細工とか、自然物利用とかは、教師の指導のもとに、ある程度の技術を用するために全面的には幼稚園向きとは言えません。

幼児の創作意欲を盛りあげるための製作材料(素材)については幼稚園の先生方は常に苦心して集めておられるようで、そのことについては毎月発行されている月刊カリキュラムや保育ノート、保育の手帖や、幼児と保育など、保育指導書に毎月少しづつつけられていくようです。

最近発行になったものとしては次のものを紹介します。

○新、自由製作十二ヶ月 松石 治著
ひかりのくに社発行

(文京区立第一幼稚園長)

暴れっ子と

黙りっ子

前田 茂 則

ここはある幼稚園です。ちょうど、九時、いよいよ今日の学習が開始されました。

鬼ごっこを始めた子、砂遊びを始めた子、積木遊びに熱中する子、それぞれ各自各様の活動を始めました。こうした活気に満ちあふれた子どもたちの明るい声が、園内いっぱい広がっていきま

す。
明日への可能性を秘めた子どもたちが、喜喜として、園内いっぱい

をどころせましと活動している様子を見るのは、それだけでも大きな喜びです。だが、次の瞬間にこの喜びは、無残にも遠い彼方に飛び去り、なまなましい現実には直面させられてしまう。
今まで喜喜として活動を続けていた子どもたちのあるグループから、泣き声や罵声が、突然、生じて来た。

騒ぎの起きた方に目を転じると、ひとりの大柄な男の子（仮称M男）が、グループの仲間と喧嘩を始めたのである。これまでこのM男は、しばしば騒ぎを起している。

このM男のような友だちを泣かせたり、いじめたり、時には先生にくっつかかる暴れっ子型を、通常、反社会性児と言っている。

さて、もう一度、いろいろな活動を展開している子どもたちに目を移してみよう。

「アレ？」今度は違ったタイプの子どもが、目についた。どのグループにも属さず、ぼつりとさみしそうな様子で、友だちの活動を見守っているのみ、という子ども（仮称T子）が、目にとまった。このような前者とは異なった黙りっ子（引込み）型の子どもを、非社会性児と呼んでいる。

たいていどの幼稚園でも数の多少はあっても、幼稚園という集団生活の場に適應していけないこの種の子どもを見かける。

では、一体どうして、このような子どもが生じるのだろうか？
偶然か、それとも……またこのような集団生活の場からはみ出した子どもは、もうどうにもならないものであろうか？

以下、仮称M男とT子の事例を紹介しつつ、考察を進めていこう。この両者は、幼稚園の先生の依頼によって、遊戯療法(註)による取り扱かいを通して、適應をはかることにした。

（註）遊戯療法は遊戯によって閉じこめられた情緒やおさえられた葛藤を外部に解放し、また一方自己をコントロールし、現

実の世界に近づいてゆくと考えられている。それ故、身体的、器質的な原因によらない心理的、情緒的なからくりによって生じた神経症児や行動問題児の診断と治療に、ふつう遊戯を用いて行う方法である。

なお、この両者の遊戯治療時間は、一週一回で四十五分とし、平行して母親の面接も施行した。

暴れっ子、M男

〈概要〉 五才児で、両親、姉（八才）、本人の四人家族である。父は運送業関係の仕事を営み、経済的にはめぐまれている。

本児の身体的、器質的欠陥はない。知能は進んでいるけれど、姉ほど親の要求に答えないので、特に父親は本児より姉を可愛がるようである。本児の行動に対し小言が多く、時には体罰を課すこともあるようである。

〈経過〉 本児の遊戯治療回数は、二十一回施行したが、その中で特に本児の葛藤やフラストレーション（欲求不満）の現われ、と推察される場面の経過の概略を記した。

七回目―本児は虫かごを持って、にこにこしながら、ブレイ・ルーム（遊戯室）に入って来た。虫かごを治療者に示して、「これ、僕がとった虫だよ。」と自慢した。その後、しばらくの間、ひとりですごい自動車遊びに熱中していたが、ヘリコプターを取り出して、「オジさん、これで遊ぼうよ。」と話しかけてきた。ヘリコプターで一緒に遊

んでいるうちに自然と、相互に競争をすることとなった。特に興味ある事象は、治療者が悪人となって、本児を襲撃する、という形で展開して行った。

治療者（以後、Tと略述）「よし、あの小さなヘリコプターを襲ってやれ」と言って、本児（以後、Cと略述）のヘリコプターを急襲する。Cは、旗色が悪くなってくると、各種の自動車を用意して、Tの攻撃を防ぐ。

遂に、Cは「ここは秘密の場所で見えない所だよ。」と言いながら、自分のヘリコプターを戸棚に入れた。さらにCは、自軍を強化しTに対抗するために電気機関車、水鉄砲（Cは、これを原子銃と名付けた）などの各種の玩具を用意した。Tは、ひるまずCの陣地を襲う。これに対しCは、両手に大きな自動車を持って振り廻して、Tのヘリコプターを力いっぱいたたき落とし、真っ赤になって踏みじった。さらに水鉄砲（原子銃）を持ち出して、「これでヘリコプターも、お前（治療者のこと）もやっつけてやるのだ」と大声で叫んで、「ダンダンダン」と声を出して撃ってきた。

Tが胸をおさえて、「やられた」と言って、倒れると喚声をあげて喜色満面であった。

その時、Tが（家の誰れかをやっつけたのだね？）との発言を見ると、一瞬、驚いた様子を示したが、ニヤリと満足気な表情となった。

八回目―初めのうちは、電池で動く汽車遊びに熱中していた。そ

のうちに自動車競争をすることになった。最初のうちCが優勢であったけれど、後半になってTの旗色が、良くなってくると、いろいろと車を取りかえることによって、Tを追い抜こうとした。

しかし、それでも形勢を挽回することがむずかしくなると、手でTの自動車をひっくり返して、「こんな悪人の自動車なんか、こわしてしまえ」とブツブツ呟いていた。

十三回目―遊戯室に來所してから、しばらくの間、持参のコマによる遊びに熱中していた。やがて、戸棚からヘリコプターを持ち出して、「これで競争やろうよ。」と話しかけてきたので、競争遊びを始めた。

まずCとTが、相互のヘリコプターをぶつけ合う形で競争が展開されて行った。

特にTが、意図的に「パパママのヘリコプターが、M君のヘリコプターを打ち負かしてしまうのだぞ!」との発言をして競争を続けて行くと、Cはこの遊びにもすごく熱中し、何度も何度も、「エイ、エイ、エイ」の掛け声と共に、Tのヘリコプターをたたき落とし、力いっぱい踏みにじった。

さらにCは、この遊びを發展させ、戸棚からあらゆる自動車類の玩具をおろし、その玩具の三分の一をTに配分し、自分はその三分の二を取り、これらの玩具を使って、ますますTとの競争遊びを通して、打ち負かすことにもすごく熱中した。

そして、その遊びの間に幾度も幾度も、「エイエイ、やっつけてしま

え!」という感情をこめた発言を繰り返していた。

ここに記した三回の経過の概略は、最も顕著に攻撃性を発散した場面であることを、物語っている。

特にこれらの遊びの場面の中で、治療者を悪人として、治療者を攻撃する態度は、親を中心として意識的無意識的に抱いている日頃の攻撃的感情や不満感を、治療者に移動(感情転移)して、爆発させた象徴的行為と考えられる。

概要のところまで述べたように、本児は姉に比べて、両親により、より多くの愛情によって育まれる機会に乏しく、また親の期待が過剰であるために、同一年令の子どもと比較して、知能は相当に進んでいるにもかかわらず、日常生活では親の要求水準に合致する行動をとれないことから、小言を言われたり、罰せられることが多く、本児の心は満たされることが少なく、こうして反社会的な行動をするようになったのである。

〈親(母親)との面接〉

M男の母親とは、合計三回の面接しか行なうことができなかった。この三回の面接内容を記すと、次のようである。

一回目―「父は、どちらかと言うと、本児よりも姉を可愛がっているし、やはり姉の方がね、しっかりしていますしね。」というような本児に対する両親の態度が述べられた。

次いで、本児の日常生活上の行動や態度について否定的な感情が表明された。

即ち「命令的に指示されたり、人前で叱られたりすると、すぐ立腹し理屈をこねたり、泣いたりするので、たいへんみっともない。早く態度が改まってくれればよいのに。」という内容が話された。

二回目～三回目―「遊戯治療を受けるようになってから、たいへん、行動に落ち着きが出てきましたし、親に対して反抗的な態度が減少してきた。」と笑顔で近況を述べた。

「もうこの調子だと大丈夫（母親が、ひとり合点して）。」と言ってから、直ちに本児の進学について話しを進めていった。

「この子の姉は△△学校に入学していますので、M男もぜひ○○学校に入学させませんか。とにかく、何としてもバスしてもらわねば……他家に対する面子もありますしね。」

という内容であった。

この三回目の面接以後、面接のための連絡を幾度かとったけれども、もう子どもは大丈夫です。おかげさまでたいへんよくなり、ましたので。」との挨拶があって、母親との面接は自然消滅という形で終ってしまった。

そのために、このM男の治療は、この本児のみを対象とすることとなったのであるが、この親の態度が、M男の治療効果を水泡に終わらせてしまう、という結果を生み出すことになったのである。

黙りっ子、T子

〈概要〉 五才児で、両親、姉（十三才、先妻の子）、本人、妹（三才）の五人家族。垣根を接して母方の祖父母が、住んでいる。身体的、器質面での欠陥は、よく風邪をひくという程度で特にならない。知能の発達は、正常である。（もともと、知能検査は、治療の効果が見え始めてから施行した。）

幼稚園では、ほとんど先生や友だちと話さない緘黙児である。

〈経過〉 本児に対しては十五回にわたる遊戯治療を施行した。

一回目―遊戯室に入ってから、約十五分くらい不安気な様子を示していた。そして、Cはきよるきよると顔を動かすのみで、行動に移る気配は見られなかった。

そのうち、無言のうちに絵本に近づいて、治療者（以下Tと略）の顔を見た。

「Cちゃんは、この絵本を見たいのね？」と尋ねると、Tの顔を見てうなずいた。

予定時間が終了するまで、絵本を見ていたけれど、一言も喋らなかった。

二回～三回目―前回と同様に一言も喋らないで、絵本を見ることで終わった。

四回目―入室して、しきりと絵本のある方に注意を向けて、時折、Tの顔を見た。

T「ああ、Cちゃん、絵本をとってほしいのね。」と言うと、無言ではあるが、顔面に喜びの色を表わした。しばらく、椅子に坐っ

て、その本を見ていた。Tが「この絵は、何かな?」、「これは何を
しているのかな?」と話しかけてみると、しばらくTの顔を見てい
たが、「これはライオンよ」、「お花をとっているの」という発言をよ
わよわしい声であつたけれど、初めてTにした。

この後、これまでの絵本読みから離れて、はめ絵遊びに熱中しだ
した。少し行動に積極性が現われてきた。

五回目―入室すると、すぐにはめ絵に近づき「これ」と言つて指
さした。はめ絵遊びに熱中し、うまく挿入できない箇所にくわす
と一瞬、Tの顔を見る。「ああ、教えてもらいたいのね。」と気持を
受容してやると、にこりとうなずいた。やはり、行為によつて、話し
かけてはくるが、発言することは、ほとんどなかった。しかし、そ
の行動にはますます積極性、自発性が現われてきた。

六回目―遊戯室に入ってくるや、頸を前後左右に動かして、何を
して遊ぶうか、という顔付である。やがて戸棚の両用紙を指さした
ので、それを取つてやった。本児白からが、クレヨンを出して絵を
かき始めた。

しばらくは、絵をかくことに熱中していた。この後、絵本を見
る。次いで色紙を取り出して、飛行機を折り始めたので、Tも一緒に
なつて色紙を折つた。完成した飛行機を相互に飛ばして遊ぶ。こ
の遊びにも飽きると、棚の最上段にある大型の色紙を指さして、「あ
れ」と要求した。それを取つてやり、「何を作るの」と聞くと、「お馬
さん作るのよ。だから鉄があるの。」と発言をした。

この経過記録からもみられるように、行動の活発化はもとより、
単に行爲によつて、話しかけてくるだけの消極的な態度が、漸次、消
失し始め積極的に自分から、発言する様子が出現して来た。この傾
向は、治療回数を進めて行くにつれてますます如実に現われてき
た。

このC子は、治療を通して心中の葛藤や慾求不満を発散させるこ
とによつて、漸次、自発性、積極性を獲得して行つたのであるが、
このC子の成長発展を助成した要因として、面接を通して変化した
親の態度(面接の項、参照)を指摘することができる。

〈親(母)との面接〉

C子の母親とは、合計七回の面接を行なつた。その経過の概略を
以下に記してみよう。

一回目―本人の生育歴、家族歴を述べた。「C子は、特に身体
面、器質面で異常はないが、未熟児(出産時の体重が二五〇〇グラ
ム以下の新生児を指す)であつたので、保育器で育てた。そういう
ことなどから、本人の身体を心配して、ちょっとのことでも注意す
ることに努めている。祖母も同じような態度で本人に接している。
しかし、こんなに注意深く育ててきたのに、どうして幼稚園などで
不活発なのでしょうね。本当に困つてしまう。」という内容が語られ
た。

二回〜三回目―「やはり動作が不活発ですね。物を記憶すること
にもぶいし、数も二十までがやつとなのですよ。子の年(C子の年

命)を尋ねても、直ぐには答えられないのですよ。これらのことから考えて、少しアレ(精神薄弱の意)ではないかと思うのですよ。

幼稚園のクラスでの動きをみていても、他のお子さんより鈍感のようだし……」というような否定的感情が、つぎつぎと表明された。

四回目―「何かこの頃、C子の行動が少し変わってきたのですよ。家でも行動が荒っぽくなったし(この現象は、遊戯治療の過程でみられる一過性のものである)、私たちから注意されると、これまで黙って泣きべそをかいていたのに文句など言い始めましたよ。案外と元氣なところもあるのですね。この子がこれまで引つ込みがちだったのは、私にも責任があるように思えます。子どもばかり非難しても……」

ここに初めて、子どもに対する肯定的な態度と、自分自身の子どもに対していた態度を振り返るようになってきた。回を重ねるにつれて、子どもに対する肯定的な態度、と自己理解を深めて行くようになった。

七回目(最終回)―幼稚園に行くことを大変に喜ぶようになってきたし、積極的に文字や教を学ぼうとしたり、また、ことばの使い方にも変化が現われ、その上、語句が大そう明瞭になってきました。

先日、クラスではり絵をしているC子の様子を観察していたのですよ。糊を順番にもらいに行くのですが、他の子どもさんは割り込んで、どんどんもらって行くのですね。C子も割り込んで早くもらえば、とその時はそう思いました。そして帰宅したC子にそのこと

を話すと、「規則に従がうことの方が大切でしょう」と言われ、子どもは成長しているのだなあ、と教えられました。今までの自分は、あまりにも子どもに干渉し過ぎていて、子どもを支配することに、専念していたようです。これからは、子どもと一緒に進んで行く、と固く心に誓いました。」

これまで二つの事例について述べてきたが、その後の動向を付記しておこう。

遊戯治療終了後、C子は非常に明るくなり、元気に活動を続けている。これに対し、M男の方は、治療終了後かなりの期間、彼本来の姿となり、元気な日々を送っていたけれど、また最近では以前にもまして、はげしい問題行動を反復するようになってきたそうである。

異質な問題行動を持った両者ではあったが、同じ治療という過程を通りながら、どうしてこうも結果が異なったのであろうか？

イギリスの教育者、ニールが「問題児は、問題の親、問題の教師によって作られる。」と述べ、また、ヘレン・パーカスト女史が「親たちの中には、猛スピードで前後の判断もなく、突っ走る運転手に似たような人たちがいる。子どもを自動車のようになりに駆り立てるのである。彼らは、子どもが自分の子どもであるという事実だけで、子どもを牛耳ることができると考えている。彼らは一步ふみとどまらず、子どもがこんな緊張に耐えるかどうかを考えてみようとはしないのである。」と指摘していることばを、おとなは心して味わってみることが大切なのではなからうか？

(井荻児童研究所)

ヨーロッパの旅
(四)



平井信義

マールブルク——この町は、西ドイツの中で、ぼくの最も好きな町である。八年前のときも、この土地で楽しい一週間を過ごした思い出がある。その一つは、ウエーバー嬢の思い出、もう一つはお城であった。

お城は、十二世紀からのもので、町の北側の小高い丘の上にあった。そのお城を取り囲むようにして、町の赤い屋根屋根が続いていた。この前来たときは、三月であった。外套の襟を立てるようにして、駅前通りの通りをすぎ、坂道をお城の方にのぼっていった。人通りが少なく、町は鎮まりかえっていた。お城への坂道は、どんどんと登っている。

両側の二階・三階の家並みの間を、左に折れ、右に折れして、だんだんに細くなり、籬と籬との間を漸く人が通れるような場所もあつた。そこは、近道のための急な石段であつた。そこを一人、とっぴりととっぴり登りながら、ぼくは女友だちとここに来る筋骨書きを考えていた。

その女友だちは、淋しい顔立ちの中年の婦人であつた。黒い髪の下に、眉毛がうすく、頬が僅かにこけていた。フランクフルトで会つた外交官の夫人である。彼女は、音楽を学びたかったのであるが、親たちのすすめで外交官夫人になつた。そして、夫に伴つてこのドイツに來たのであつた。しかし、外交官夫人として社交に努めるのが好きでなかつた。何とかして好きな音楽を学びたいと願つたのであつたが、夫はそれをなかなか許さなかつた。その反対をおし切つて、とにかくフランクフルトにいるピアノの教師を訪問し、その序でに音楽会に來た。その時に、ぼくは彼女と廻り合わせたのであつた。それは、音楽会場のテラスであつた。

一人の日本婦人が、テラスの巨大な大理石の柱の側に、黒味があつたドレスを着てしょんぼりと立つていた。ぼくという日本人の存在に気がついてゐるのかいないのか、とにかく柱を背にして立つていた。その目は、手にしたプログラムを見るときもなく見ているようであつた。

三ヶ月も日本の婦人に会わなかつたぼくにとつては、それだけ

で懐しい思いがした。しかし、そばに近寄つてもいいものかどうか、ぼくはためらつた。話しかけても、受けつけないのではないか——と思われるほど、彼女はじつと石の柱を背にしてたずんでゐるのであつた。およそ、テラスの雰囲気には似つかわしくなかつた。

テラスでは、高い天井から釣りおろされたいくつかの大きなシャンデリアの下には、部屋いっぱい輝きがあつた。その中を、イヴニングドレスを着た女性を右にして腕を組んだ男性が、幾組も幾組も足を揃えてぐるぐると歩き廻つてゐた。若い男女がくるかと思ふと、それに次いで年を取つた老夫婦が歩いてくる。それはテラスいっぱい渦となつてゐた。音楽会の休憩時間のテラスには、きまつてそのような華かさがある。しかし、ぼくにはその華かさを楽しむ氣持が起きなかつた。渦の中に入つて、一巡してみたら、ぼくの氣持には異質な渦でしかなかつた。背の高いドイツ人の間で、ちょこちょここと走り廻るねずみのような感じがした。そこで、ちょうど彼女の側を通る時に、人の渦から抜けでてしまつた。

「日本の方でいらっしゃいますか？」

とぼくは、その彼女の前に立ちふさがるようにしてたずねた。

我に返つたように、彼女はぼくの方を見上げ、まぶしそうに目をしばたいた。黒いひとみは、澄んでいて、しかもうるんだよう

な感じがする。幾分広い白い額から浮き出すように眉毛が濃かった。突然の日本語の話しかけに、彼女は夢からさまされたように、ぼくの顔をまじまじと見た。そして、こころのつながりをどう捉えてよいのか、迷っているようであった。

「もう、お永くドイツにいらしてるんですか？」

「いいえ、去年でございます。ずっと、ボンにおりましたが、四日ほど前にここへ参りました」

彼女は、ためらいながらぼくに言った。そして、ぼつんと口をつぐんでしまった。二人の間に沈黙があった。その沈黙をどのように処理してよいか、ぼくもためらった。彼女は相変らず、黙っていた。それ以上、口をきこうとしないようであった。とりつく島がないという状態でもあったが、何か心の底に大きな苦悩が横たわっているようであった。何か深く苦しんでいるように思われた。

「ぼくは、ここに住んでいます。もし、何かご不自由がありましたら、おっしゃって下さい」と、ぼくは名刺を出した。彼女はそれを受けとり、名前を見るときもなくハンドバッグにいれて、「どうもありがとうございます」と軽く会釈をした。しかし、ぼくには殆ど関心がないようであった。ぼくは、うら淋しい気持ちにとらわれた。そして、彼女の前から遠のいて、自分の席のある二階へ上っていった。そのあと、彼女がどのように行動したかは、

全く知らなかった。

彼女に二度目に会ったのは、ちょうど音楽会から一週間目、ぼくの下宿から程遠くない町角であった。和服の下に、白い足袋が小走りに向ってくる。ぼくは、彼女を待ち受けるようにゆっくりと歩く。人通りの少ない町角であったから、彼女もすぐにぼくの存在を認めた。視線が合う。彼女の目は大きく見開くようにして、更に数十歩近づいてきた。

「ちょっと、あなたにご相談したいと思って……。おでかけでしょうか？」

と、向い合うや否や、彼女の方から口を開いた。

「散歩しようと思っていたのです。特に目的がないから、下宿に帰ってもいいのです。散歩しながらでもよければ、静かな林のある方にいてもいいのです」

「そうね……」と、彼女は顎に右の人差指を軽く当てて、ちょっとためらった。

「大したご相談じゃないんですけれど、そうね、今、わたくし、疲れているものですから、お蔭屋の方がいいわ」

ぼくは、彼女を右に歩かせながら、下宿に引き返した。そして、門の鍵をあげ、玄関の鍵をあげ、階段をのぼった。ぼくの部屋は二階の廊下のつき当りにある。階段から二階に入る扉の鍵をあけて、戸を開いた。がらんとした廊下は、いつものようであっ

た。下宿のおばさんも、でかけているようであった。

ぼくの部屋のを鍵をあける。数日前、かかりの悪くなっていたその鍵は、がちがちと音ばかり立てて、なかなかあかなかった。ぼくが何辺か廻している間、彼女は足を揃えて、じっと立っていた。

「具合が悪いのですが、なかなかおしてくれない……」一人言のようにいって、最後の力をいれると、ガチャンと大きな音が出て、扉があいた。部屋いっぱい、西陽が射しこんでいた。

「明るいいいお部屋ね」

「静かですよ。それに、安いので助かっています。どうぞ、ソファーの方へおかけ下さい」

彼女は、遠慮なく、ソファーに腰をおろして、ハンドバッグからハンカチを取り出して、口元に当てた。

「何か、冷いものをあげましょうか。或いは、コーヒーを入れましょうか。お湯は、すぐ湧くんです」

彼女は、どっちを所望しようかと考えているようであったが、

「あなたがお飲みになりたければ頂きますけれど、私、あんまり頂きたくないの」

「それじゃ、あとにしましょうね」

二人の間には、俄かに心の隔たりが無いようであった。ぼくの心にも、話の内容をどう選ぶかという迷いが起きなかったし、

彼女にも遠慮をしている様子が見られなかった。

「実は、ご相談というのはね、夜、ねむれなくて困っているのです。何か、いいお薬をもっていらっしやらないかしら——と思って。或いは、お薬の名前をきかせて下さってもいいのですが、薬屋で買うのは、おっくうな気もしているんです」

「医者の方がないと、この国では薬を売ってくれませんものね。いくつかの睡眠薬を持っていますが、どのようにねむれないのですか……」

「ねつきはいいのですが、夜半に、そうね、一時頃かしら、目がさめると、そのあと寝つかれないで、朝までよく寝ていないのです……」

「ねようとしても、なかなかねむれないので苦しいですね」

「そうなの。前にも何回かこういことがあったから、そう驚いてはいないのですが、今度はちょっとひどいのよ。ノイローゼでしょうね」

「ノイローゼって、わかっていらっしやるんですね」

「わたくし、自分でも原因がはっきりしているんですけど、解決策がないの……」

「原因がわかかっていても、解決策となるとむずかしいことがありますね……」

彼女は、黙った。足袋の先に草履をつっかけてぶらぶらさせな

がら、黙ってしまった。ぼくは、彼女の心中で、どのような葛藤があるのだろうか——と、考えた。

「どっちにしようかと、解決のつかない問題があるのですね」

「どっちか——というのじゃなくて、いくつも——といった方がいいのよ。わたくしの主人は外交官なんです。だけど、私には外交官の妻としての資格がないのね。だから、つい、わがままになってしまうの。主人に悪いと思うことがしばしばよ。でも、わたくしの心の動きを見詰め、それに素直に生きようとする、どうしてもそうなるのね。それに、わたくし、子どもがあるのです。七才になるのだけれど、日本においてしまったの。学校の問題があるし、こちらでの私の生活も考えておばあちゃんにあずけてきてしまったの。それがね、数日前の手紙で、手に負えない子だといってきたのよ。悪い母親ね。子どもを放り出してしまつて……。放り出すっていうわけではないけれど、その方がいいと思つて決心したことなんですけれど……」

彼女は、目を伏せると、その目から、一雫の涙があふれ、鼻と頬の間を通して流れた。一雫が流れると、あとからあとからいく雫かの流れが後を追つた。

慌てて、ハンカチで目を被う。こらえきれなくなったように、両眼をハンカチで被い、その上に両手をしっかりと当てた。おえつをこらえていたが、胸元が大きく波立ち、しゃくり上げるよう

にそれが逆り出た。

ぼくは、黙つてそれを見ていた。悲しみがぼくにも伝わってくるようであつたが、ぼくは、どのように言つてあげたらよいか、どう行動したらよいか、よく分らなかつた。身動きができないようになつて、じつと座つていた。

「ごめんさい。どうしたんでしょ。こんなことになると思いませんでした。急に悲しくなつてしまつて……」

「それが、ぼくにも伝つてくるような気がします……」

「ただねむれば、何でもないのですけれどね。お薬をいただければと思つてきたのですが、もっと、根本的な解決策を考えなければ、いけないのね。子どものことをどうしたらいいでしょ。手に負えないっていうんですが、ちょっと、おばあちゃんからの手紙を読んで下さる？　そして、何か仰しゃつて……」

彼女は、ハンドバッグを開いて、一葉の航空便を取り出した。

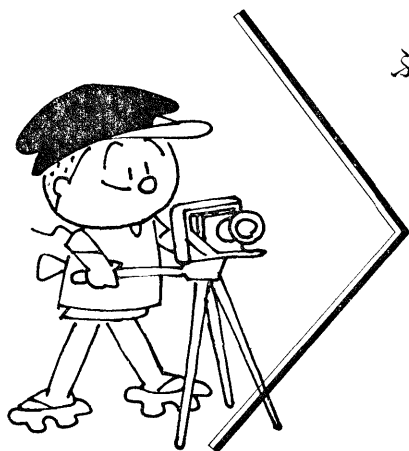
(つづく)



別冊

キンダーブック

物語絵本 (夏)



ふくちゃんとおもちゃのくに

マンガでおなじみの横山隆一先生作のふくちゃんが登場致します。ふくちゃんはおもちゃのくにへ行って日ごろのおこないを反省しました。

では夏号で!

構成・文／横山隆一
製作／おとぎプロダクション
定価 50円

幼児の教育 第六十三巻 第八号

八月号 © 定価六〇円

昭和三十九年七月二十五日 印刷

昭和三十九年八月一日 発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津守 真
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三の一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

☆本誌ご購入についてのご注文は発売所
所 フレーベル館にお願いいたします。

■新しい教育要領の全文

幼稚園教育要領

A5判 20頁 定価10円 千10円

■新しい教育要領の解説書 坂元彦太郎編

幼稚園教育要領解説

A5判 208頁 定価320円 千70円

- ・編集委員全員による新しい教育要領の詳細な解明
- ・現場の実践への手引き書
- ・幼稚園教育要領全文および関係法令他掲載

■保育界の動向と保育学会の研究発表を収録

1963年版 保育学年報

B5判 316頁 定価1200円 千100円

◎特集・本邦幼児発達規準の研究

1962年版 保育学年報

B5判 198頁 定価 600円 千100円

フ
レ
ー
ベ
ル
館

坂元彦太郎著

幼児教育の構造

A五判 二四三頁
定価 四五〇円

幼稚園教育要領改訂委員長として新要領をつくった著者が、幼児教育の構造を体系的にまとめ、幼児教育の基礎的組織、幼児教育課程や指導計画、六領域などについての解説を加え、新幼稚園教育要領の本旨を究明した書。

岡山県保育史編集委員会編

岡山県保育史

A五判 三六六頁
定価一〇〇〇円 上製本

岡山県下における明治期から大正、昭和の戦前、戦後にわたる保育の歴史。保育施設や保育者、研究組織にいたるまで岡山県下における保育資料を収録してあります。

伊藤隆二著

幼児の知能と知能テスト

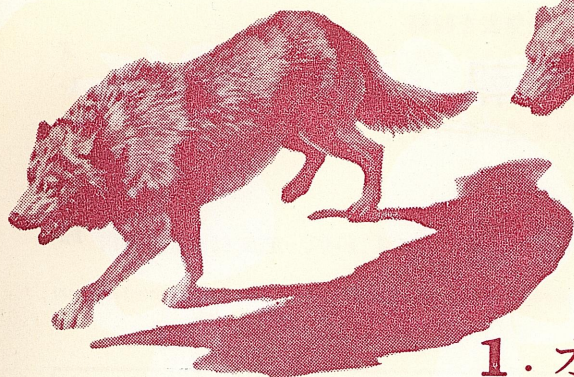
A五判 一九八頁
定価四五〇円 上製本

幼児の知能のはたらきや発達過程を説き、知能テストの使用法にまで論究した、知能検査のための手引き書。

— フレーベル館の新刊図書 —

世界で初めての 絵で見る シートン動物記

美しい絵と、格調高い文章で、
幼い心にロマンと感動を誘う決定版!!
幼児から小学生までの好読物です。



絶賛発売中

1. オオカミ王 ロボ
2. 灰色グマ ワーブの冒険
3. ぎざ耳小僧
4. 銀ギツネ物語

* 1、2、3 巻既刊、4 巻 8 月 発刊、以下隔月刊行

* B 5 判 80 頁 ケース 入り 豪華 本

全 1 2 巻 = 各 巻 4 9 0 円

トッパンの絵物語 シートン動物記

● 全巻ご予約の方には、第 7 巻配本と同時に美麗ブック・エンドを進呈します。全巻揃 5,880 円



株式会社 フレーベル館 東京都千代田区神田小川町 3 の 1
電話 東京 (291) 7781-5